

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1514集

# 箱崎 70

— 箱崎遺跡 第119次調査報告 —

2024

福岡市教育委員会



# 箱崎 70

— 箱崎遺跡 第119次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1514集



遺跡略号 HKZ-119

調査番号 2123

2024

福岡市教育委員会



# 序

福岡市は玄界灘に面し、古来より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。なかでも東区箱崎周辺には、古代から近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建設工事に伴う箱崎遺跡第119次発掘調査について報告するものです。この調査では土坑、溝、柱穴等を検出し、平安時代から江戸時代に至るまでの土器、陶磁器等が出土しました。これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係者の方々には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会  
教育長 石橋 正信

# 例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市東区箱崎1丁目2485番地の共同建設工事に先立ち、令和3(2021)年度に実施した箱崎遺跡119次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託として実施した。
3. 本書の執筆と編集は田中健が担当した。
4. 本書の遺構の作成は屋山洋・田中が担当した。遺物実測図の作成は吉富千春・田中が担当した。製図は田中が担当した。拓本は林 由紀子が担当した。
5. 本書の遺構・遺物写真は屋山・田中が撮影した。
6. 本書の遺構実測図中の方位はすべて磁北である。
7. 検出遺構は、1面は1001・2面は2001から検出順に通し番号を付けた。
8. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。  
SD 溝 SK 土坑 SP 柱穴
9. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理・公開する予定である。大いに活用していただきたい。
10. 本文中の陶磁器分類は以下の文献に拠る。  
宮崎亮一編 2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』(太宰府市の文化財 第49集)

遺跡名	箱崎遺跡	調査回数	119次	調査略号	HKZ-119
調査番号	2123	分布地図図幅名	34 箱崎	遺跡登録番号	2639
申請地面積	354.31 m <sup>2</sup>	調査対象面積	182.72 m <sup>2</sup>	調査面積	182.72 m <sup>2</sup>
調査期間	令和3年9月1日～令和3年11月12日			事前審査番号	2020-2-742
調査地	福岡市東区箱崎1丁目2485番				

# 本文目次

## 第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 遺跡の立地と環境	3

## 第2章 調査の記録

1. 調査の概要	6
2. 第1面の遺構と遺物	
① 溝 (SD)	6
② 土坑 (SK)	11
3. 第2面の遺構と遺物	
① 溝 (SD)	14
② 土坑 (SK)	18
③ 柵列	27
まとめ	27

# 挿図目次

第1図 箱崎遺跡と周辺の遺跡 (1/25000)	2
第2図 箱崎遺跡調査一覧 (1/10000)	4
第3図 箱崎遺跡第119次調査位置図 (1/1000)	5
第4図 箱崎遺跡第119次調査範囲 (1/500)	6
第5図 第1面・第2面調査区全体図 (1/150)	7
第6図 調査区土層図 (1/40)	8
第7図 SD1043 出土遺物 (1/3)	8
第8図 第1面溝配置図 (1/150)・第1面溝断面図 (1/40)	9
第9図 SD1065 出土遺物 (1/3)	10
第10図 SD1078 出土遺物 (1/3)	11
第11図 SK1041 (1/40)・出土遺物 (1/3)	11
第12図 SK1053 (1/40)・出土遺物 (1/3)	12
第13図 SK1075 (1/40)・出土遺物 (1/3)	12
第14図 SK1076 (1/40)・出土遺物 (1/3)	13
第15図 SK1079 (1/40)・出土遺物 (1/3)	13
第16図 SX1044 (1/60)・出土遺物 (1/3)	14
第17図 SD2018 遺物出土状況 (1/40)	14
第18図 SD2018 出土遺物 (1/3)	15
第19図 SD2058・2101 出土遺物 (1/3)	16
第20図 第2面溝配置図 (1/100)・第2面溝断面図 (1/40)	17
第21図 SK2005 (1/40)・出土遺物 (1/3)	18
第22図 SK2015 (1/40)・出土遺物 (1/3)	18
第23図 SK2022 (1/40)・出土遺物 (1/3)	19
第24図 SK2040 (1/40)・出土遺物 (1/3)	19
第25図 SK2042 (1/40)・出土遺物 (1/3)	20
第26図 SK2055 (1/40)・出土遺物 (1/3)	20
第27図 SK2059 (1/40)・出土遺物 (1/3)	21
第28図 SK2063 (1/40)・出土遺物 (1/3)	21
第29図 SK2092 (1/20)・出土遺物 (1/3)	22
第30図 SK2093 (1/40)・出土遺物 (1/3)	23
第31図 SK2100 (1/20)・出土遺物 (1/3)	23
第32図 SK2107・土層図 (1/40)・出土遺物 (1/3)	24
第33図 SK2110 (1/40)・出土遺物 (1/3)	25
第34図 SK2112 (1/40)・出土遺物 (1/3)	25
第35図 SK2113 (1/40)・出土遺物 (1/3)	26
第36図 SK2140 (1/40)・出土遺物 (1/3)	26
第37図 柵列検出状況・横断面図 (1/40)	27

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会（経済観光文化局埋蔵文化財課）は、東区箱崎1丁目2485番地における共同住宅建設における埋蔵文化財有無についての照会（2020-2-742）を受理した。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡内にあり、周辺の確認調査で遺構を確認しているため、申請地内でも遺構の存在が推測された。このため、遺構の保全等に関して申請者と協議したが、予定建築物の構造上、埋蔵文化財への影響が回避できないため、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和3年8月23日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、令和3年9月1日から11月12日まで発掘調査、令和5年度に資料整理および報告書作成を実施した。

申請地354.31㎡のうち調査対象は、工事で埋蔵文化財に影響が及ぶ182.72㎡で、それ以外の範囲は現状保存している。

調査にあたっては、事業者様および近隣の方々からご理解をいただくとともに多大なご協力を賜りました。また、発掘調査・報告書執筆に際して以下の方々にご指導を賜りました。記して深謝いたします。

## 2. 調査の組織

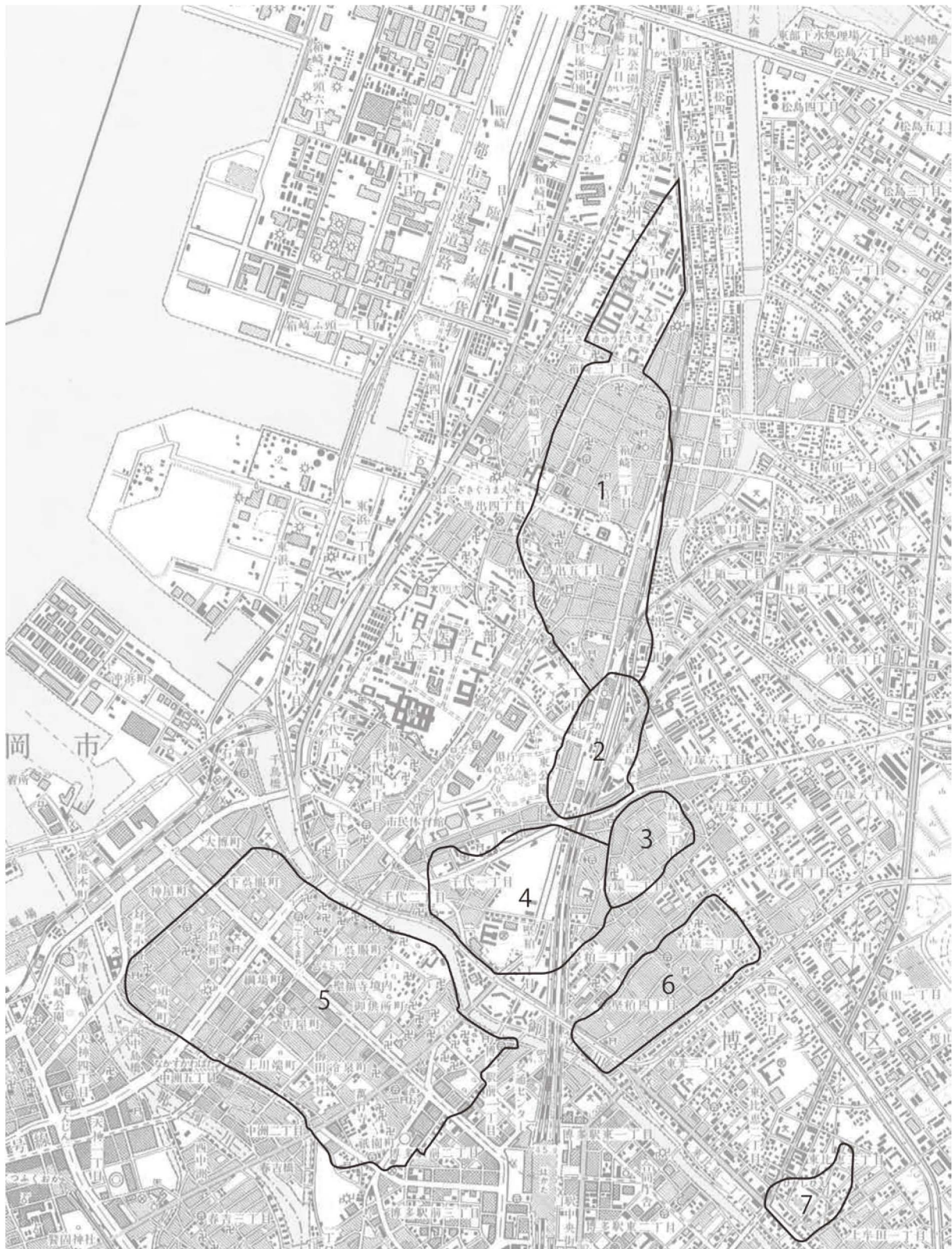
調査主体 福岡市教育委員会  
調査委託 個人

〈発掘調査 令和3年度〉

調査総括	福岡市経済観光文化局文化財活用部	埋蔵文化財課	課長	菅波 正人
庶務		埋蔵文化財課	調査第1係長	本田 浩二郎
		文化財活用課	管理調整係長	石川 あゆ子
事前審査		文化財活用課	管理調整係	内藤 愛
		埋蔵文化財課	事前審査係長	田上 勇一郎
調査担当		埋蔵文化財課	事前審査係	三浦 悠葵
		埋蔵文化財課	調査第1係	屋山 洋・田中 健

〈整理・報告 令和5年度〉

整理・報告総括	埋蔵文化財課	課長	菅波 正人	
整理・報告庶務		係長	井上 繭子	
		文化財活用課	管理調整係長	石川 あゆ子
整理・報告担当		文化財活用課	管理調整係	内藤 愛
		埋蔵文化財課	調査第2係	田中 健



1. 箱崎遺跡    2. 吉塚本町遺跡    3. 吉塚祝町遺跡    4. 堅粕遺跡    5. 博多遺跡群  
 6. 吉塚遺跡    7. 東比恵三丁目遺跡

第1図 箱崎遺跡と周辺の遺跡(1/25000)



## 第2章 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の立地

箱崎遺跡は、博多湾と多々良川河口の多々良瀉の間にある細長い砂州上に立地する。この砂州は「箱崎砂層」と呼ばれる新砂丘砂層で形成され、海浜砂と風成砂部分からなる。石英質ないし真砂質で粗粒砂の場合が多い。砂層の形成開始時期は、縄文海進極盛期の高海面期後の相対的な小海退期とみられる(下山1998)。

発掘調査で検出した砂丘の標高から旧地形を復元すると、遺跡の中央付近を頂点として、東西にゆるやかに下降する南北方向の尾根線があるとわかる。これが現在の街区にほぼ沿うように箱崎宮付近まで伸びている。この南側には浅い谷状の鞍部を挟んで標高 2.5 ～ 3.5m の安定した高所がある(中尾 2018a・b)。また、九州大学箱崎キャンパス内の地質調査によれば、当該地は AD1060 年以降 AD1281 年以前に地層の堆積速度が急に増大していることがわかり、この時期に洪水によって河川から砂が大量供給され、砂州が急成長したという(市原・下山 2019)。

### 2. 遺跡の歴史的環境

遺跡全体の検討(久住編 2019・佐藤 2013・中尾 2018a・b)をもとに概略を述べる。

弥生時代から古墳時代は、部分的に集落・墓が営まれるが小規模で散発的である。集落の本格的な展開は、箱崎宮の創建が契機となる。『箱崎宮縁起』によれば、創建は 921 年頃で、飯塚市大分八幡宮から遷座し、大宰少弐藤原真材が造立にあたったことがわかる(重松 2018 : p.26)。創建前後の 10 ～ 11 世紀前半頃は、遺跡南東部に集落が広がり、越州窯系青磁碗やイスラム陶器、石帯巡方、大宰府や鴻臚館との関わりを示す瓦類が出土している。11 世紀後半～ 12 世紀前半には、井戸や土坑の数が増加し、貿易陶磁器・墨書陶磁器が多く出土する。とくに墨書陶磁器は遺跡北西部に集中し、「宮寺縁事抄」の記録にあるような宋人の居住が想定される。12 世紀中～ 13 世紀前半には、遺跡全域に集落が展開する。鉄やガラスを集落内で生産した痕跡もみられる。元寇前後～室町時代にあたる 13 世紀後半～ 16 世紀には、引き続き遺跡全域で生活痕跡が確認できるが、15 世紀以降は遺構が少ない。

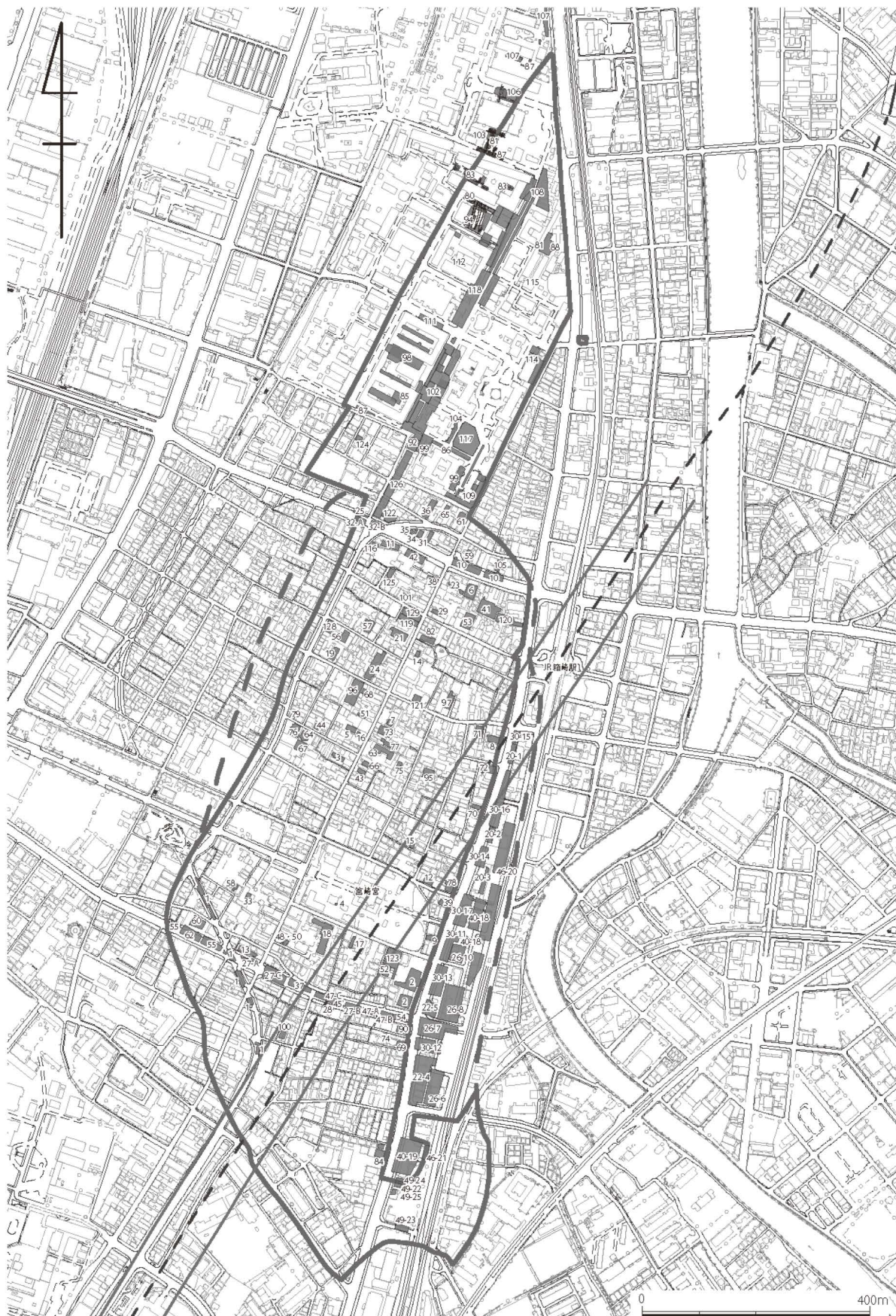
### 3. 本調査地周辺の調査

**21次調査** 第1面では13世紀中～14世紀の井戸や土坑、第2面では12世紀中～13世紀前半の掘立柱建物、井戸、土坑、溝、墓を検出している。墓は12世紀中頃で、5基の木棺墓と土坑墓がまとめて検出されており、集落における共同墓地と思われる。

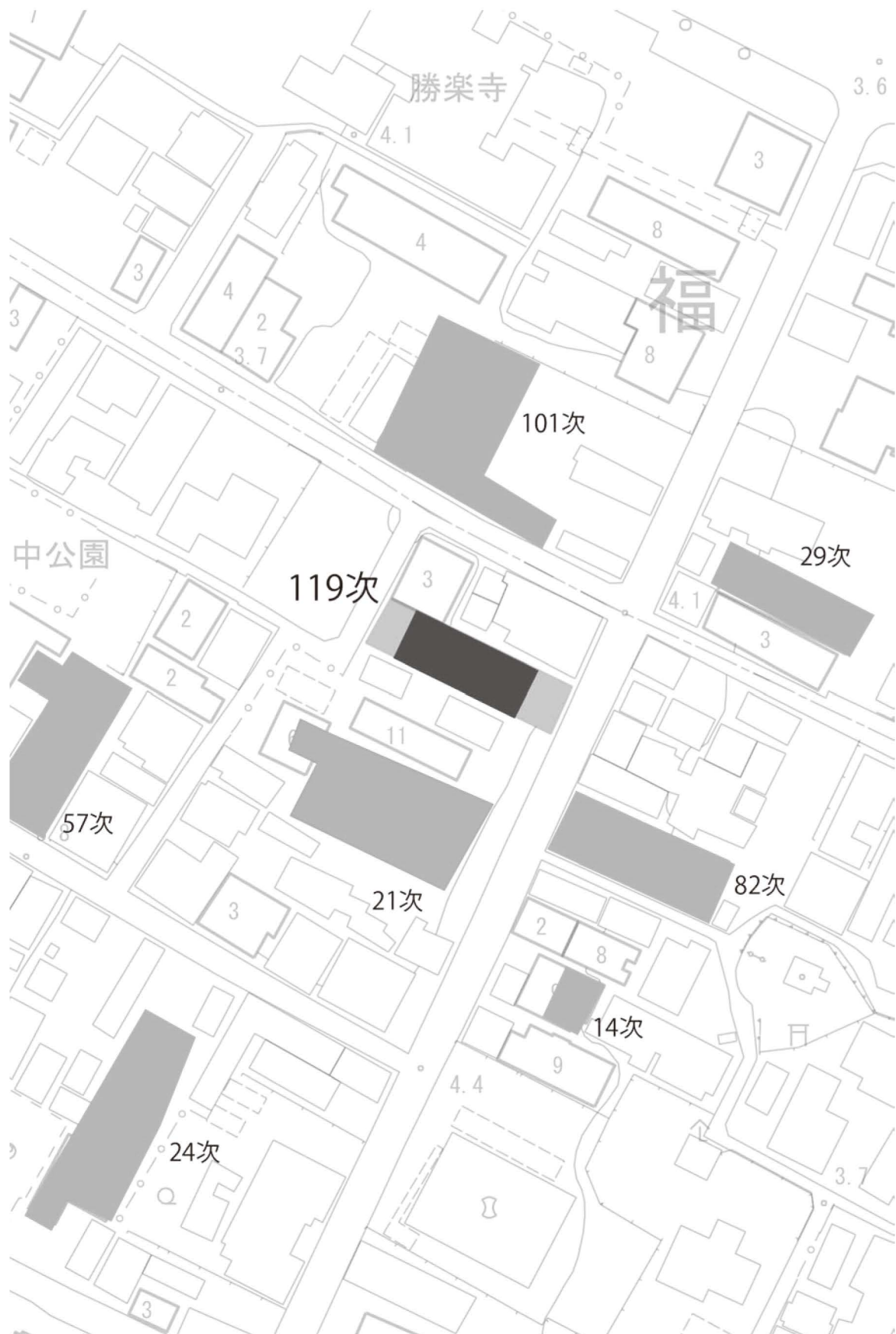
**29次調査** 第1面の調査で、12世紀後半以降の土坑や柱穴などを検出している。

**82次調査** 11世紀後半～14世紀前半にかけての土坑、井戸などを検出している。

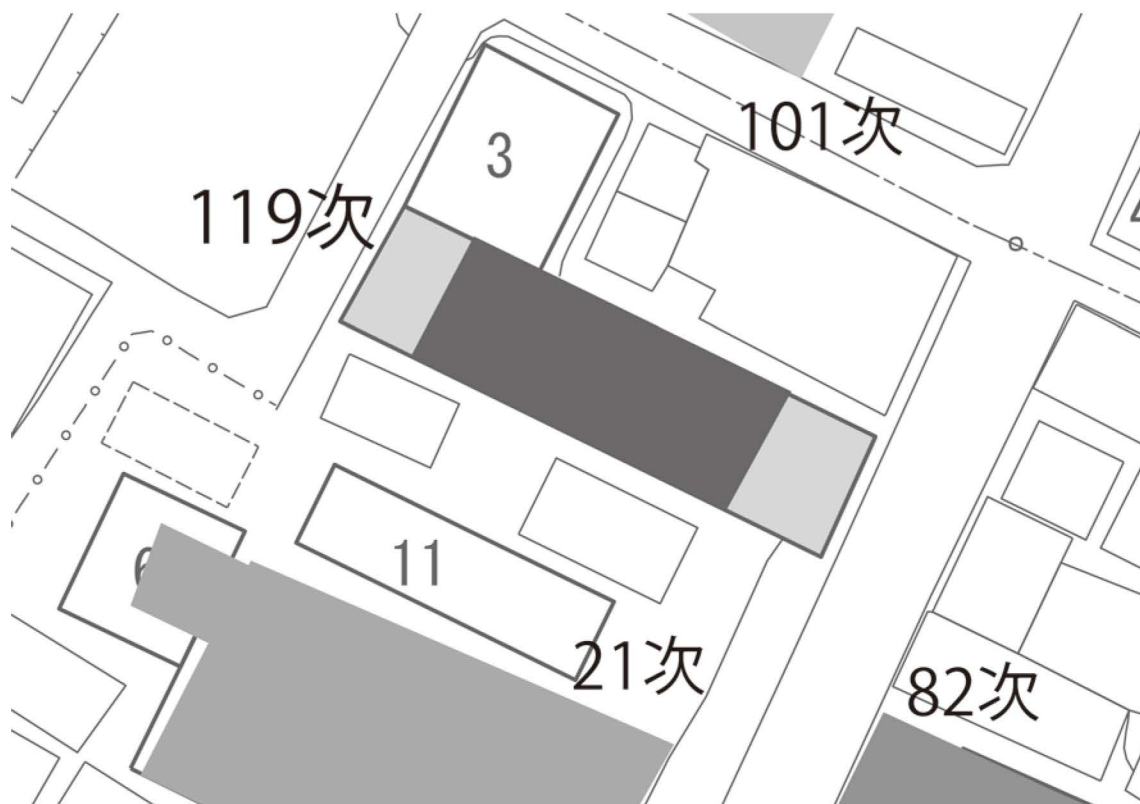
**101次調査** 12世紀中～後半頃の墓、13世紀以降の土器廃棄遺構や溝、井戸などを検出している。



第2図 箱崎遺跡調査一覽(1/10000)



第3図 箱崎遺跡第119次調査位置図(1/1000)



第4図 箱崎遺跡第119次調査範囲(1/500)

## 第3章 調査の記録

### 1. 調査の経過と概要

第119次調査地点は箱崎遺跡の北西側にある。

調査は令和3年9月1日に開始した。表土鋤取り時および調査中の廃土は調査区内で処理する必要があったため、調査区を4区画に分け、まず調査範囲東側の1/2程度（Ⅰ区、Ⅱ区）を先行して調査し、残る西側1/2（Ⅲ区、Ⅳ区）の順に調査を実施した。

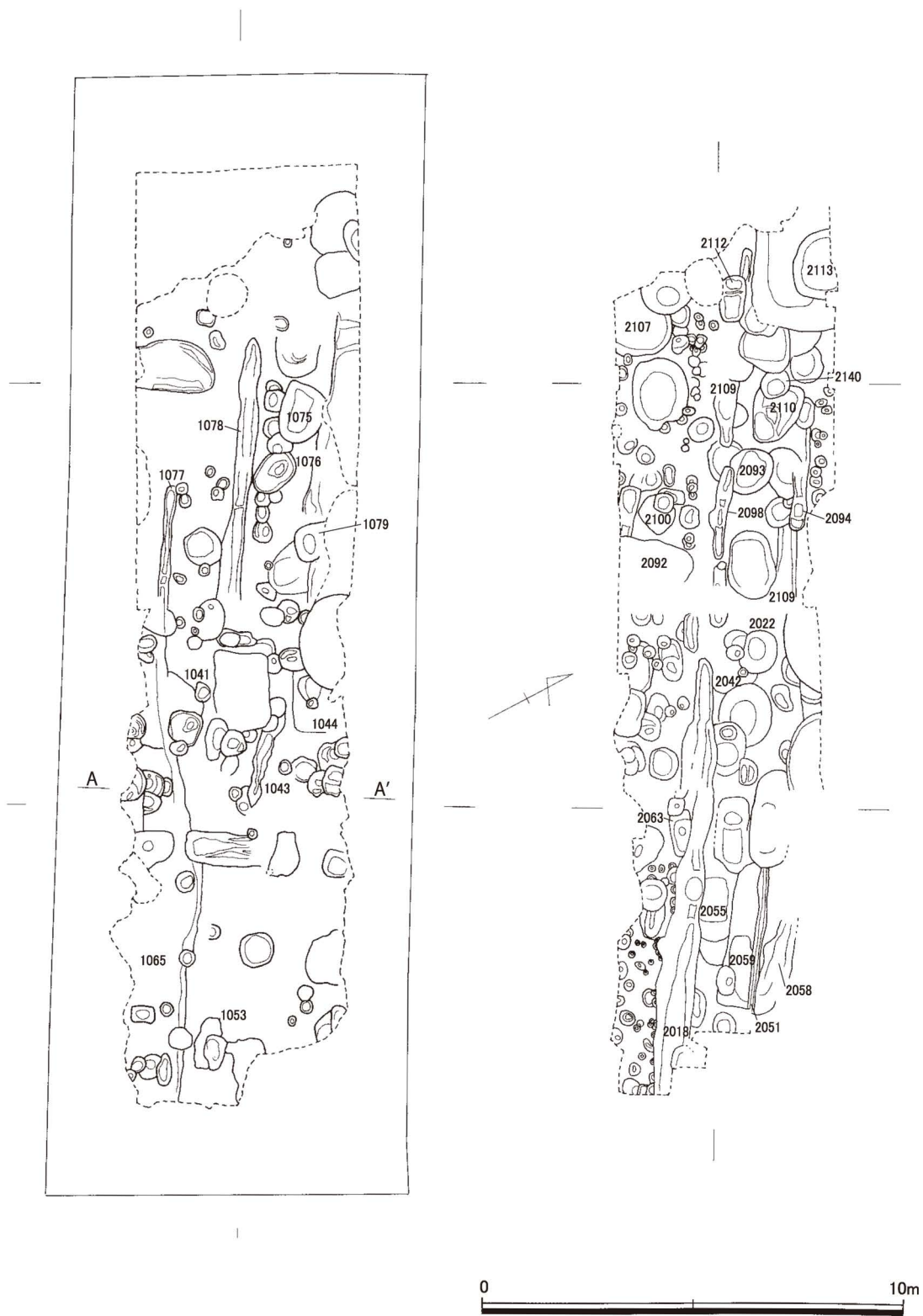
調査前の現地表面は標高道路との比高差はなく、標高は概ね4mである。調査は暗灰褐色粘砂上面（標高3.3m前後）を第1面、淡黄色砂上面（標高2.6m前後）を第2面として行った。

検出した遺構は、平安時代から近世にかけての柱穴、土坑、溝などで、第1面は13世紀～16世紀代、第2面は12～13世紀代に位置づけられる。なお、第2面の淡黄色砂の上面には縞状の整地層を確認した。出土遺物は、土師器、陶磁器、陶器、石製品等でコンテナケース94箱分。

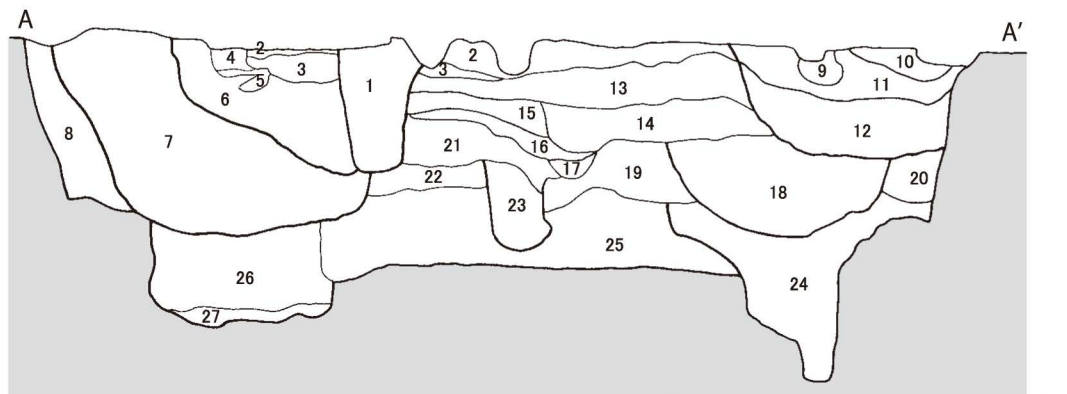
### 2. 第1面の遺構と遺物

#### ①溝（SD）

1面では溝状遺構を4条確認した。すべて東西方向に延びており、現在の街割りと並行して延びている。



第5図 第1面・第2面調査区全体図(1/150)



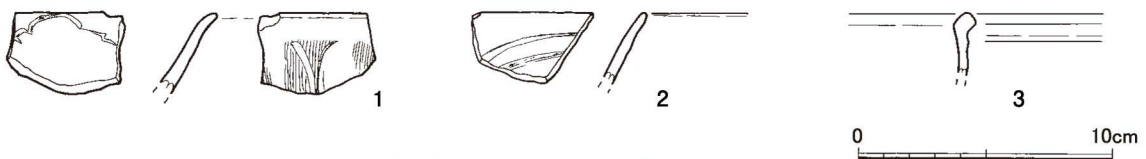
第6図 調査区土層図(1/40)

## ※土層図注記

- 1.青灰色砂質土 ピット埋土
- 2.灰色砂質土
- 3.灰色砂質土 淡黄色砂が多量に混じる
- 4.灰色砂質土 炭化物(1~5mm)少量混じる
- 5.灰色砂質土 4より少し暗い
- 6.青灰色粘砂 炭化物(2~15mm)が多量に混じる 鉄分が下に集中する 溝埋土か?
- 7.暗青灰色粘砂 炭化物(2~10mm)が多量に混じる 黒褐色粘砂が下に堆積する
- 8.暗青灰色粘砂 炭化物(2~5mm)が多量に混じる。鉄分が下に集中して堆積する 粘性が強い
- 9.褐灰色粘砂 炭化物(2~3mm)が少量混じる 鉄分が少量混じる
- 10.灰褐色粘砂 炭化物(2~3mm)が多量に混じる 白色粘土ブロック(10mm)が微量混じる
- 11.灰褐色粘砂 炭化物(2~10mm)が多量に混じる 焼土ブロック(10mm~40mm)が多量に混じる
- 12.暗灰褐色粘砂 炭化物(2~10mm)が多量に混じる 白色粘土ブロック(7~15mm)が多量に混じる
- 13.暗灰褐色粘砂 炭化物(2~7mm)が多量に混じる 白色粘土ブロック(5mm)が微量混じる
- 14.暗青灰色粘砂 炭化物(2~8mm)が微量混じる
- 15.黄灰色砂質土+暗灰色粘砂 炭化物(2~5mm)が少量混じる。
- 16.暗灰色粘砂 黄白色砂質土が少量混じる 炭が帯状に堆積する
- 17.暗灰色粘砂 微細な炭化物が少量混じる 黄白色砂が少量混じる
- 18.暗灰色粘砂 炭化物(3mm~15mm)が多量に混じる 白色粘土ブロック(5~15mm)が微量に混じる
- 19.黄白色砂質土+暗灰色粘砂 炭化物(2~5mm)が少量混じる
- 20.暗青灰色砂質土 炭化物(2~10mm)が多量に混じる 鉄分が下に集中して混じる
- 21.暗灰色粘砂+淡黄色砂の互層 厚さ8mm程で互層になっている 炭化物(3~10mm)と鉄分が少量混じる 整地層
- 22.暗灰色粘砂+淡黄色砂の互層 厚さ3mm程で互層になっている 炭化物(2mm)と鉄分が少量混じる 整地層
- 23.淡黄色砂質土 壁際と底面に沿って暗灰色砂質土が堆積する ピット埋土か
- 24.暗灰色粘砂 炭化物(2~5mm)が少量混じる 比色粘土ブロック(5mm)が上部で集中して堆積する 遺構埋土
- 25.淡黄色砂 炭化物(2~3mm)が微量混じる 地山より少し汚れる
- 26.暗褐色粘砂+オリブ黄色砂質土 炭化物(2~15mm)が多量に混じる 黄色ブロック(2mm)微量混じる 溝埋土
- 27.黒褐色粘砂 炭化物(3~5mm)が多量に混じる 粘性が強い
- 28.淡黄色砂 地山

**SD1043(第8図)** 調査区中央で検出し、東西方向に延びる溝である。長さは別遺構に切られるが、1.7m程である。幅0.3~0.5m、深さ0.2m程である。埋土は暗褐色粘砂を主体とする。

**出土遺物(第7図)** 1~2は青磁碗の口縁部片である。灰白色の胎土に明オリブ灰色の釉をかける。外面に櫛目文を施す。2は灰白色の胎土に灰オリブ色の釉をかける。3は陶器鉢の口縁部片である。回転ナデを施す。

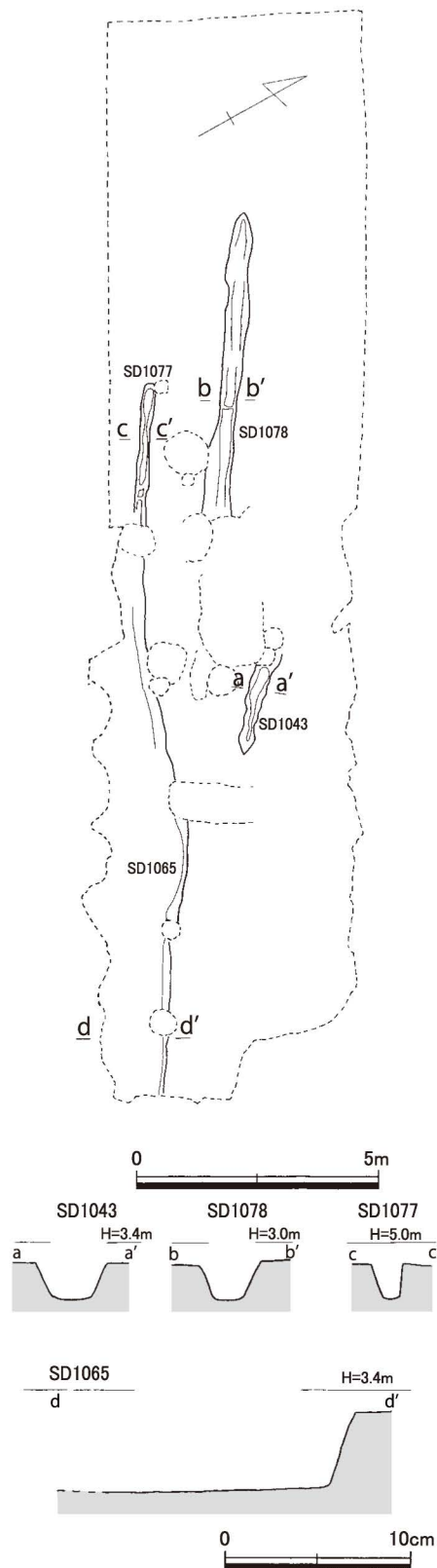


第7図 SD1043出土遺物(1/3)

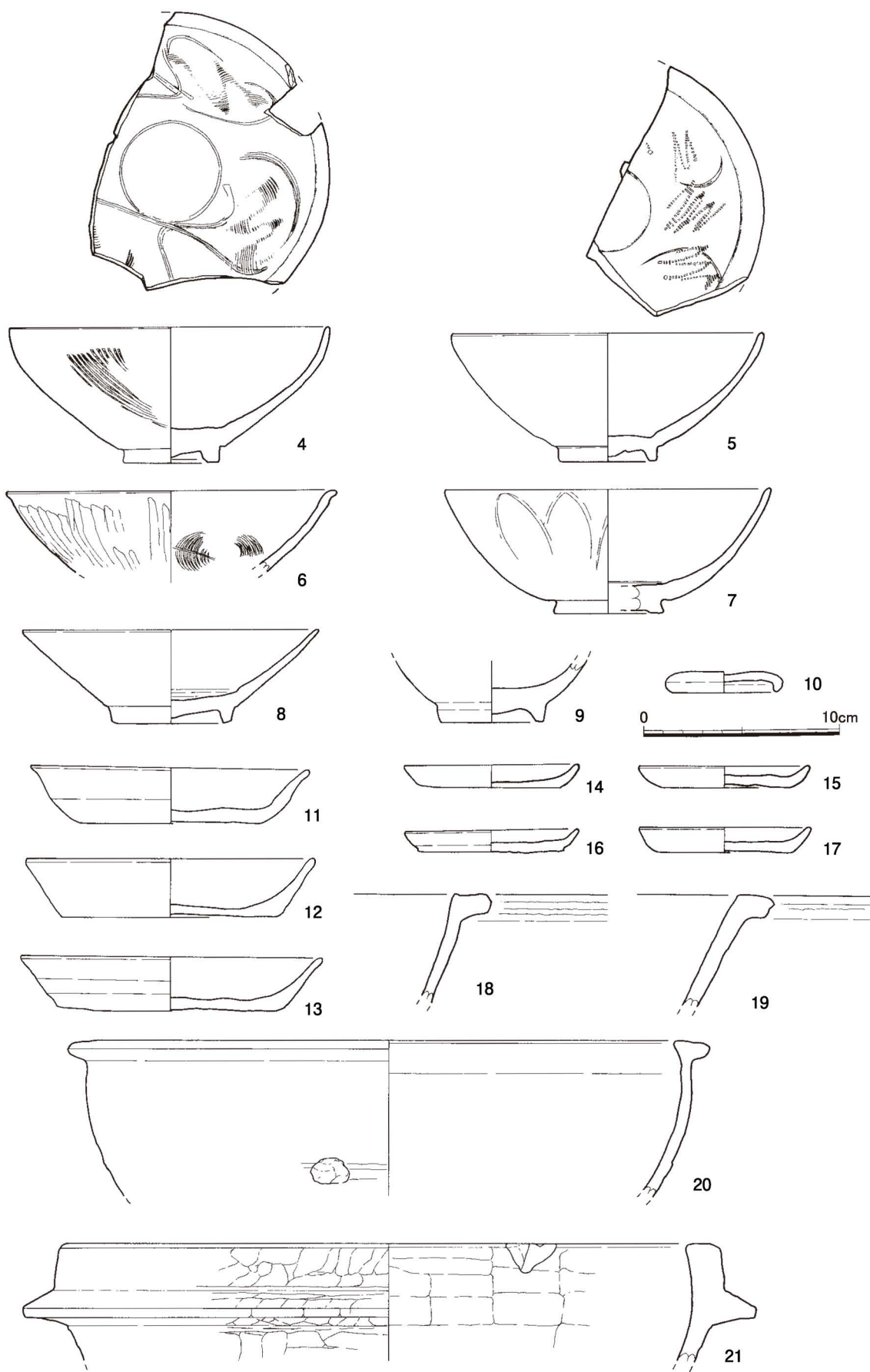
**SD1065 (第8図)** 調査区南端に沿って検出し、東西方向に延びる溝である。長さは東側が調査区外に延びるが、現状で11m程である。幅は南側が調査区外に延びるが、現状で0.5～2m、深さ0.38～0.5mでわずかに西側に向かって傾斜している。埋土は暗青灰色粘砂を主体とし、黒褐色粘砂が下に堆積する。

**出土遺物 (第9図)** 4～7は青磁碗片である。4は復元口径16.4cm、器高7cm。灰白色の胎土に灰オリブ色の釉をかける。外面に櫛目文、内面に篋による文様と櫛状施文具による施文を施す同安窯系。5は復元口径16cm、器高6.6cm。淡黄灰色の胎土にオリブ黄色の釉をかける。外面は無文で、内面に篋による文様と櫛状施文具による施文を施す同安窯系。6は復元口径17cm。胎土は橙色である。外面に幅広の荒い櫛目文、内面に櫛状施文具による施文を施す同安窯系III類-1b。7は復元口径16.7cm、器高6.4cm。灰白色の胎土にオリブ色の釉をかける。外面に方彫蓮弁を施す龍泉窯系碗II類-a。8は白磁片である。復元口径15.2cm、器高4.3cm。灰白色の胎土に灰白色の釉をかける。直口縁で内面見込みに段を有し、内面見込みの釉を環状に掻き取る碗VIII類-2。9は朝鮮青磁碗の底部片である。灰色の胎土に淡く青みがかった釉をかける。10は土師器の蓋である。11～13は土師器の坏である。口径14.3～15.5cm、器高2.8～3cm。底部外形は回転糸切りで、板状圧痕を残す。口縁部外内面は回転ナデを施す。11、12の底部外面の一部黒色化している。14～17は土師器の小皿である。口径8.8～9.1cm、器高1～1.3cm。底部外形は回転糸切りで、板状圧痕を残す。口縁部外内面は回転ナデを施す。18～19は土師質の鉢片である。外内面ともにヨコナデを施す。20は陶器鉢口縁片である。明赤褐色の胎土に褐色の釉をかける。21は滑石製石鍋の口縁部片である。復元口径34cm。内外面ともにケズリを施す。外面にススが付着している。以上から時期は、13世紀前半を想定する。

**SD1077 (第8図)** 調査区南側西寄りで見出し、東西方向に延びる溝である。長さは3m程である。幅は0.3m、深さ0.18～0.4mである。埋土は暗褐色粘砂を主体とし、白色粘土ブロックを含む。出土遺物は小片が多く出土した。SD1065の延長上にあるため、SD1065と同一遺構である可能性も考えられる。



第8図 第1面溝配置図(1/150)・第1面溝断面図(1/40)

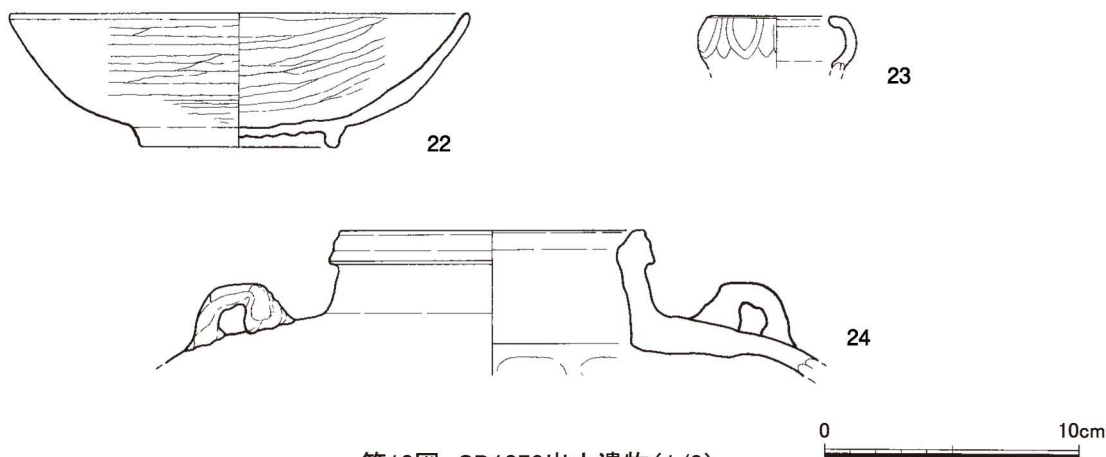


第9図 SD1065出土遺物(1/3)



**SD1078 (第8図)** 調査区中央西寄りで検出し、東西方向に延びる溝である。長さは別遺構に切られるが、現状6m程である。幅0.4～0.5m、深さ0.13～0.24mである。埋土は暗褐色粘砂を主体とする。

**出土遺物 (第10図)** 22は瓦器碗である。復元口径は18.2cm、器高5.3cmである。外内面ともにミガキが施される。底部外面に板状圧痕が強く残る。23は高麗青磁の天目台の破片と考えられる。24は陶器の耳壺の口縁部片である。復元口径12cmである。灰黄色の胎土に褐色の釉薬をかける。内外面ともに回転ナデを施す。

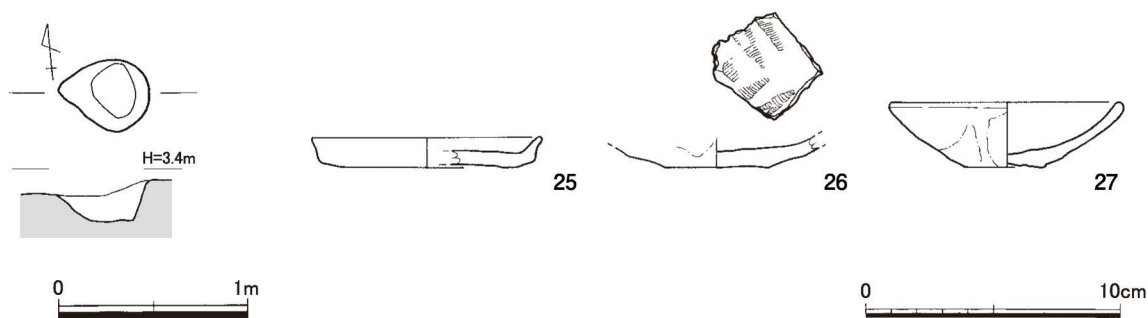


第10図 SD1078出土遺物(1/3)

## ②土坑 (SK)

**SK1041 (第11図)** 調査区中央南寄りで検出した土坑である。平面は長軸0.84m、短軸0.38m程の楕円形を呈し、深さは0.2m程と浅く、底面は平坦である。埋土は褐色粘砂を主体とする。

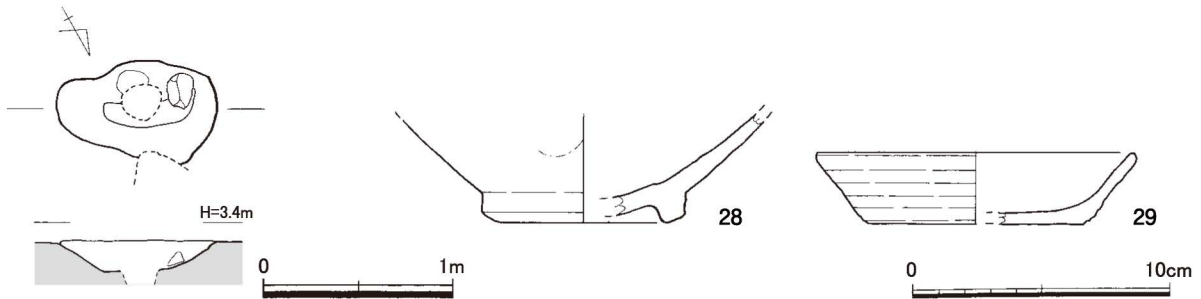
**出土遺物 (第11図)** 25は土師器の小皿片である。復元口径9cm、器高1.2cmである。底部外形は回転糸切りで、わずかに板状圧痕を残す。口縁部外内面は回転ナデを施す。26は青磁皿の底部片である。復元底径は4cmである。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に灰白色の釉をかける。内底に櫛状施文具による施文を施す同安窯系。27は陶器の皿である。口径9.2cm、器高は2.6cmである。内外面に暗赤褐色の釉をかける。外底は上げ底に削られる。



第11図 SK1041(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK1053 (第12図)** 調査区東端で検出した土坑である。平面は長軸0.85m、短軸0.5m程の楕円形を呈し、深さは0.16m程と浅い。埋土は褐色粘砂を主体とする。

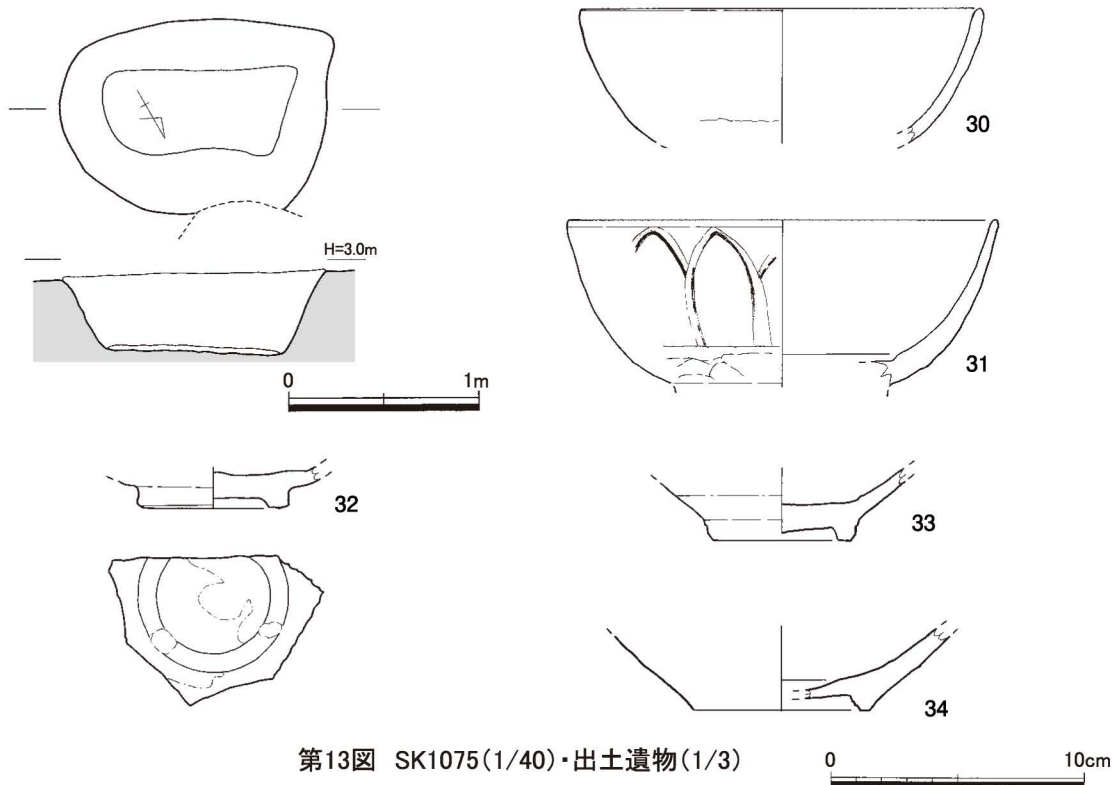
**出土遺物 (第12図)** 28は青磁碗の底部片である。底径は8cmである。白色微粒子を含む灰白色の胎土に灰白色の釉をかける。高台は露胎である。29は土師器の坏である。口径は12.6cm、器高は2.8cmである。底部外形は回転糸切りで、口縁部外内面は回転ナデを施す。



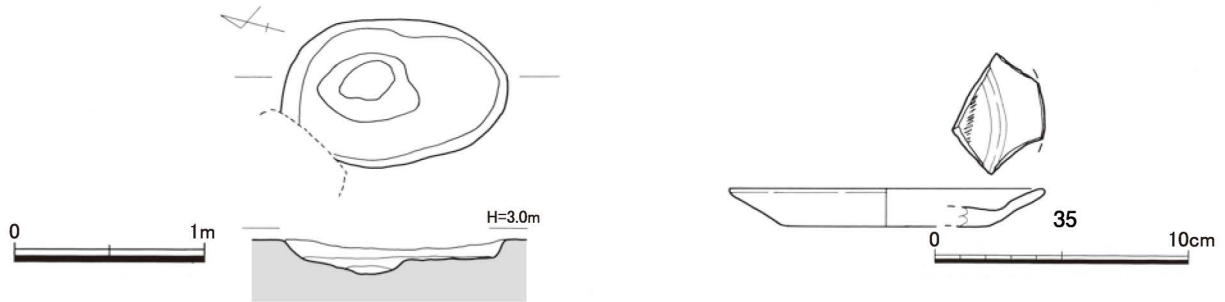
第12図 SK1053(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK1075 (第13図)** 調査区北西で検出した土坑である。平面は長軸1.4m、短軸1m程の隅丸方形を呈し、深さは0.4m程である。一部別遺構に切られる。

**出土遺物 (第13図)** 30は瓦器碗片である。復元口径は16cmである。内面はミガキ、外面は回転ナデを施す。31は青磁碗片である。復元口径は17cmである。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に灰オリブ色の釉をかける。外面に工具による鎬蓮弁を施す龍泉窯系。32は青磁碗の底部である。底径6cmである。白色微粒子を含む灰白色の胎土にオリブ黄色の釉をかける。高台は露胎である。33は白磁碗の底部片である。白色微粒子を含む灰白色の胎土にオリブ黄色の釉をかける。高台は露胎である。34は陶器甕の底部である。内外面に褐色の釉をかける。



第13図 SK1075(1/40)・出土遺物(1/3)



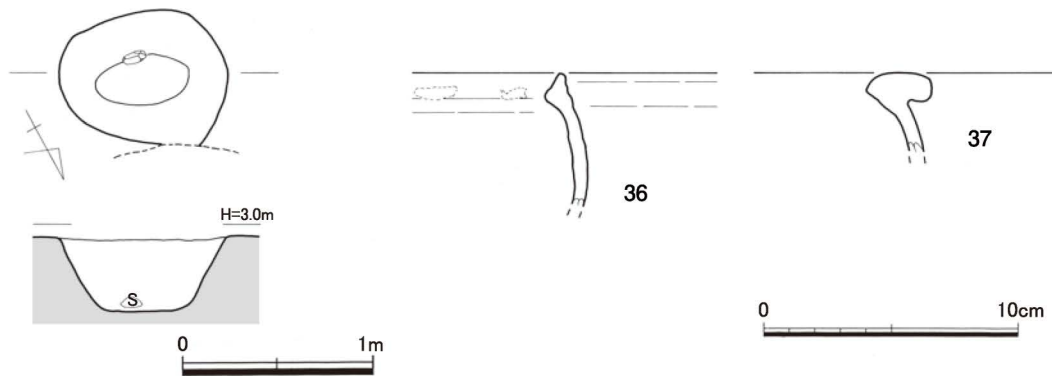
第14図 SK1076(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK1076 (第14図)** 調査区中央北西寄りで検出した土坑である。平面は長軸1.2m、短軸0.8m程の楕円形を呈し、深さは0.18m程と浅い。埋土は灰色粘砂を主体とし、白色粘土ブロックを含む。

**出土遺物 (第14図)** 35は青磁皿の底部片である。復元底径は8.2cmである。灰白色の胎土に淡い緑黄色の釉をかける。内底に楕状施文具による施文を施す同安窯系。

**SK1079 (第15図)** 調査区中央北寄りで検出した土坑である。平面は長軸0.8m、短軸0.7m程の楕円形を呈し、深さは0.4m程である。埋土は暗褐色粘砂を主体とする。

**出土遺物 (第15図)** 36は陶器鉢の口縁部片である。外内面ともに回転ナデを施す。37は陶器甕の口縁部片である。内外面に黄褐色の釉をかける。



第15図 SK1079(1/40)・出土遺物(1/3)

**SX1044 (第16図)** 調査区中央北寄りで検出した石積み遺構である。平面は北、西側が攪乱に切られるが、現状長軸4m以上、短軸1.8m以上を測る。石積みの高さは現状0.6~0.8mである。基底部分には大ぶりの石が用いられている。

**出土遺物 (第16図)**

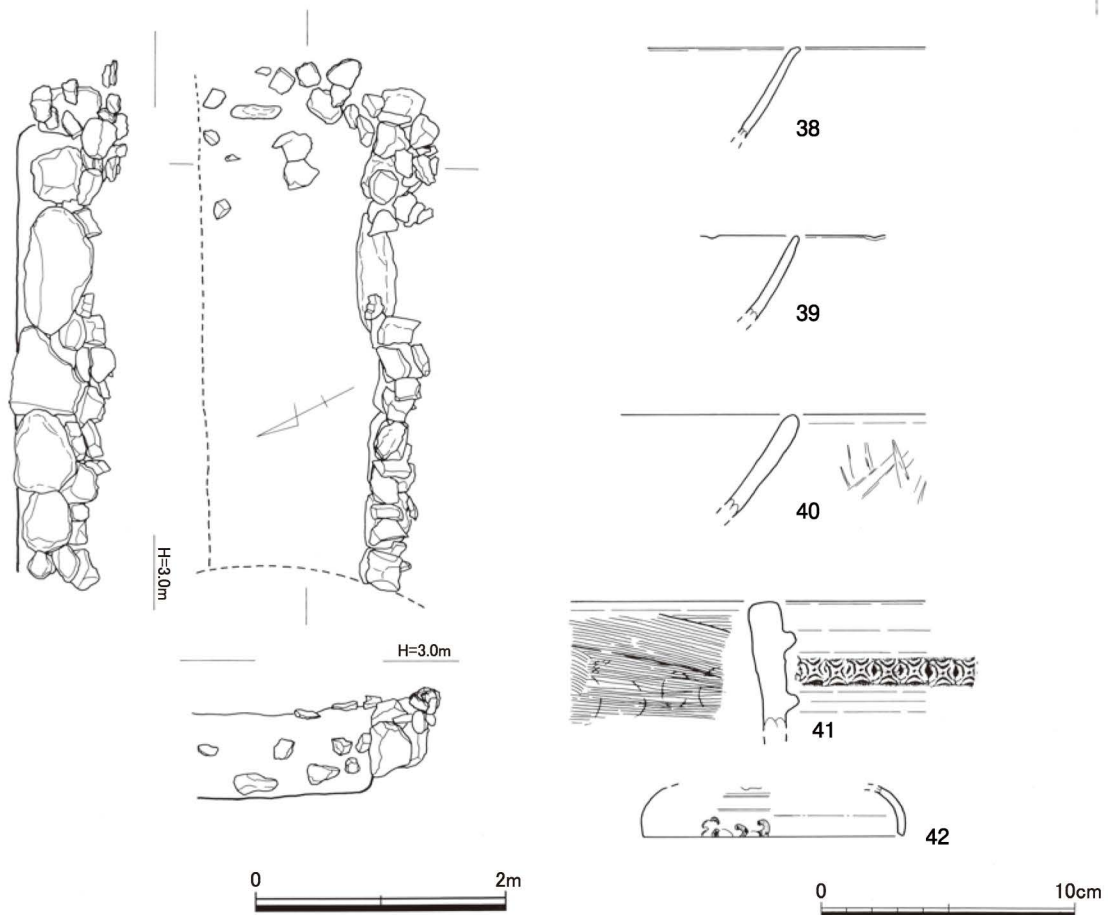
38は白磁碗の口縁部片である。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に釉をかける。

39は青磁碗の口縁部片である。黒色微粒子を含む灰白色の胎土にオリーブ灰色の釉をかける。口縁部に輪花を施す。

40は陶器甕の口縁部破片である。外内面は回転ナデを施す。外面に一部工具の痕跡が残る。

41は瓦質土器鉢の口縁部片である。口縁部外面は回転ナデを施す。外面は2条突帯の間にスタンプを施す。内面はハケ目と押圧ナデを施す。

42は青花の合子蓋の破片である。復元口径は10.2cmである。灰白色の胎土に淡く青みがかかった釉をかける。内面は一部露胎である。外面に染付による文様が施される。以上から時期は16世紀代と想定する。



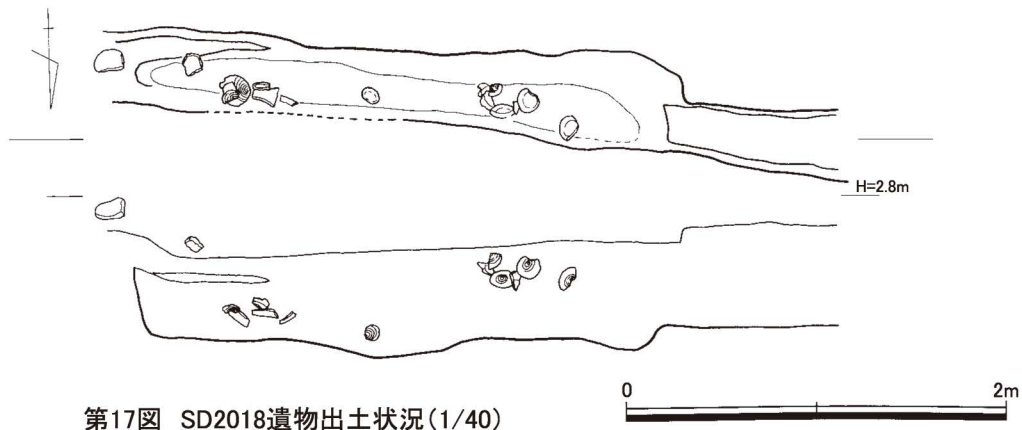
第16図 SX1044(1/60)・出土遺物(1/3)

### 3、第2面の遺構と遺物

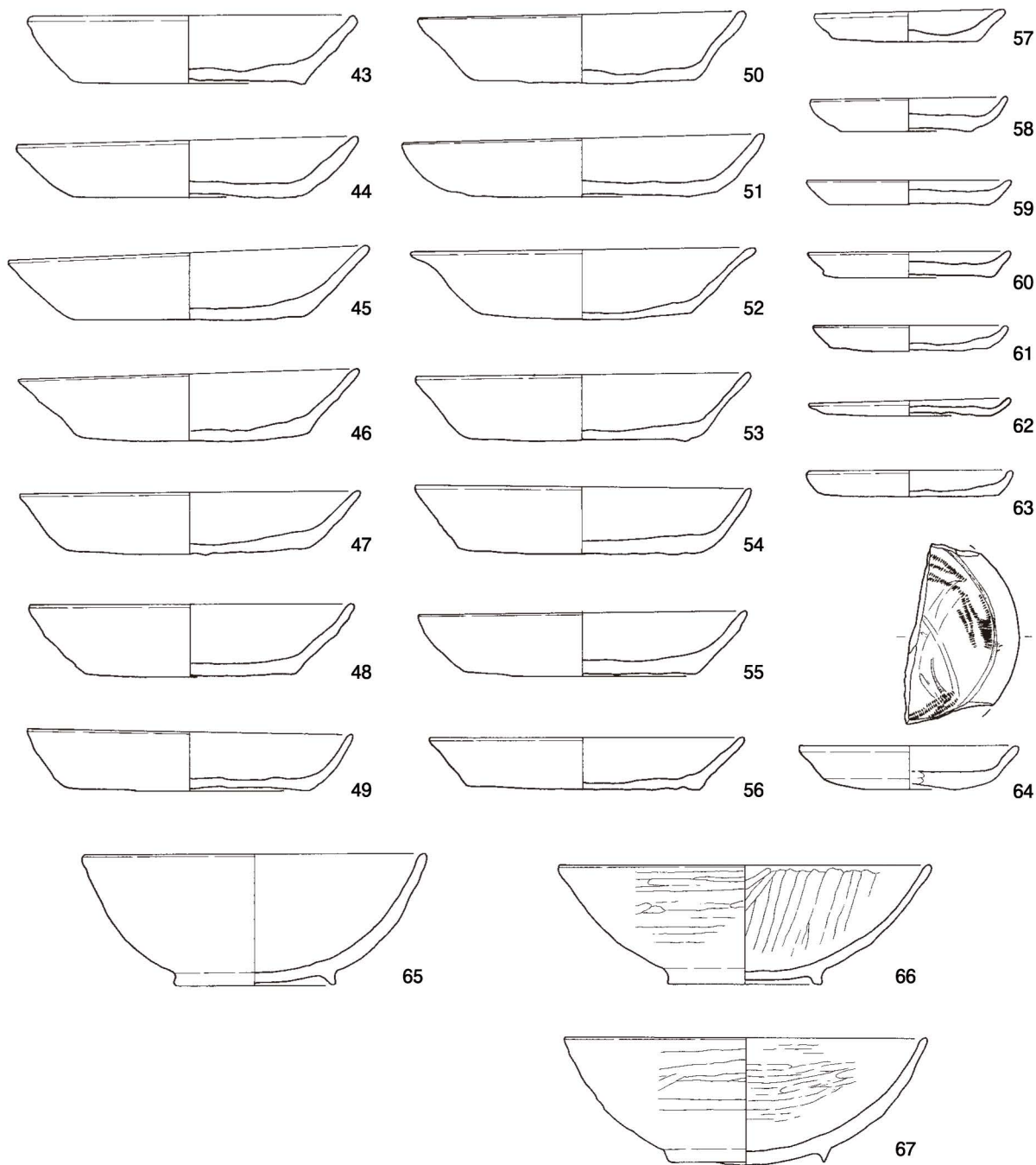
#### ① 溝(SD)

**SD2018 (第17図、第20図)** 調査区中央で検出した東西方向に延びる溝である。長さは東側が調査区外に延びているが、現状で約10mである。最大幅は約1m、深さ0.32～0.5m程である。埋土は暗褐色粘砂を主体とする。西側の立ち上がり周辺で土器、骨などが集中して出土している。

**出土遺物(第18図)** 43～56は土師器の坏である。口径14.4～16.5cm、器高2.4～3.35cm。底部外形は回転糸切りで、板状圧痕が残る。口縁部外内面は回転ナデを施す。43、49以外は内面底部に回転ナデ後に一定方向のナデを施す。57～63は土師器の小皿である。口径8.5～9.4cm、器高0.8



第17図 SD2018遺物出土状況(1/40)



第18図 SD2018出土遺物(1/3)

0 10cm

1.5cm。底部外形は回転糸切りで、板状圧痕が残る。口縁部外内面は回転ナデを施す。内面底部に回転ナデ後に一定方向のナデを施す。64は青磁皿片である。灰色の胎土に暗緑色の釉をかける。内底に篋による文様と櫛状施文具による施文を施す同安窯系。底部外面の釉は掻き取る皿1類-2b。65～67は瓦器碗である。口径15.8～17cm、器高5.5～6cm。66は内外面ともにミガキが施される。また、外面底部に板状圧痕を残す。67は内面に縦方向のミガキ、外面に横方向のミガキを施す。以上から時期は12世紀中～後半を想定する。

**SD2051 (第20図)** 調査区北東で検出した東西方向に延びる溝である。長さは東側が調査区外に延び、西側は別遺構に切られるが、現状で、3.2mである。幅は0.2m、深さは0.12～0.2mで非常に浅い。埋土は暗黄色砂質土を主体とする。遺物は土器小片のみが出土している。

**SD2058 (第20図)** 調査区北東隅で検出した東西方向に延びる溝である。長さは東側はSD2051と別遺構に切られる、西側は調査区外に延びるが、現状で1.3mである。幅は0.4～1.1m、深さは0.2～0.6mと東側に向かって傾斜している。

**出土遺物 (第19図)** 68～69は土師器の坏である。68は復元口径13.5cm、器高2.5cm。68、69ともに底部外形は回転糸切りで、板状圧痕が残る。口縁部外内面は回転ナデを施す。内面底部に回転ナデ後に一定方向のナデを施す。

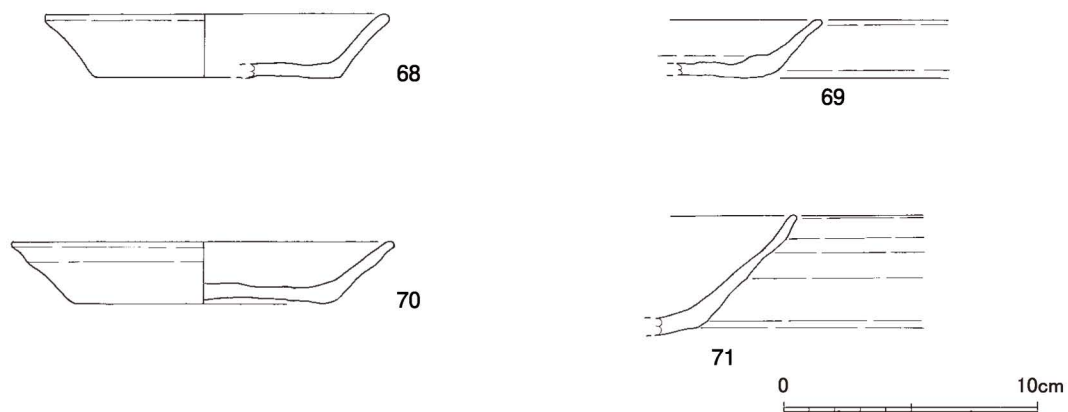
**SD2094 (第20図)** 調査区北西で検出した東西方向に延びる溝である。西側は別遺構に切られるが、現状2.4mである。幅は0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mと非常に浅い。埋土は灰褐色粘質土を主体とする。遺物は土器小片のみが出土する。

**SD2098 (第20図)** 調査区中央西寄りで検出した東西方向に延びる溝である。長さは2.2mである。幅は0.2～0.4m、深さ0.3～0.4mである。埋土は暗灰褐色粘砂を主体とする。遺物は土器小片が出土するのみである。SD2018の延長線上にあるため同一遺構であった可能性も考えられる。

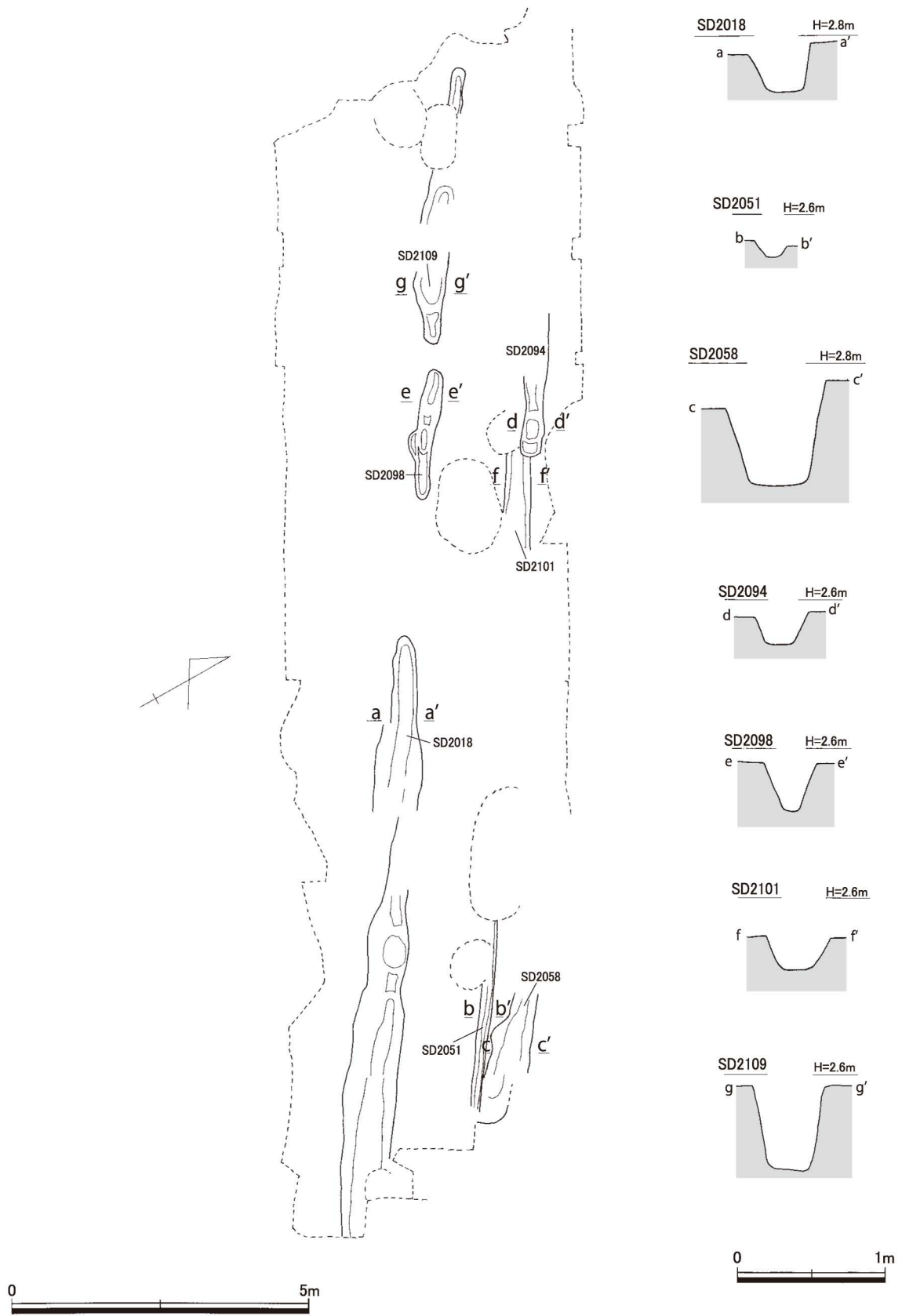
**SD2101 (第20図)** 調査区中央北寄りで検出した東西に延びる溝である。長さは西側をSD2094と別遺構に東側を別遺構に切られているが、現状で1.7m程である。幅は0.4m、深さは0.24m程である。

**出土遺物 (第19図)** 70は土師器の坏である。復元口径15cm、器高2.4cm。底部外形は回転糸切りで、板状圧痕が残る。口縁部外内面は回転ナデを施す。内面底部に回転ナデ後に一定方向のナデを施す。71は瓦器片である。外面は回転ナデを施し、内外面ともにミガキを施す。

**SD2109 (第20図)** 調査区中央西寄りで検出した東西方向に延びる溝である。長さは4.7mである。幅は0.2～0.5m、深さは0.2～0.4m程である。遺物は土器小片が出土するのみである。SD2018の延長線上にあるため、SD2098とともにSD2018と同一遺構であった可能性も考えられる。



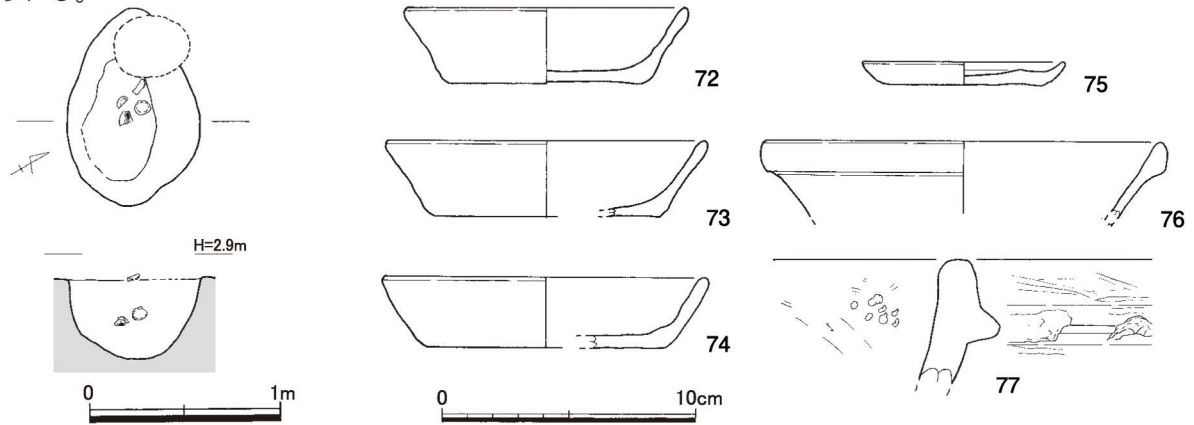
第19図 SD2058・2101出土遺物(1/3)



第20図 第2面溝配置図(1/100)・第2面溝断面図(1/40)

② 土坑 (SK)

SK2005 (第 21 図) 調査区中央で検出した土坑である。平面は長軸 1m、短軸 0.7m 程の楕円形を呈し、深さは 0.4m 程である。埋土は暗灰色砂質を主体とし、炭ブロックを含む。一部別遺構に切られる。

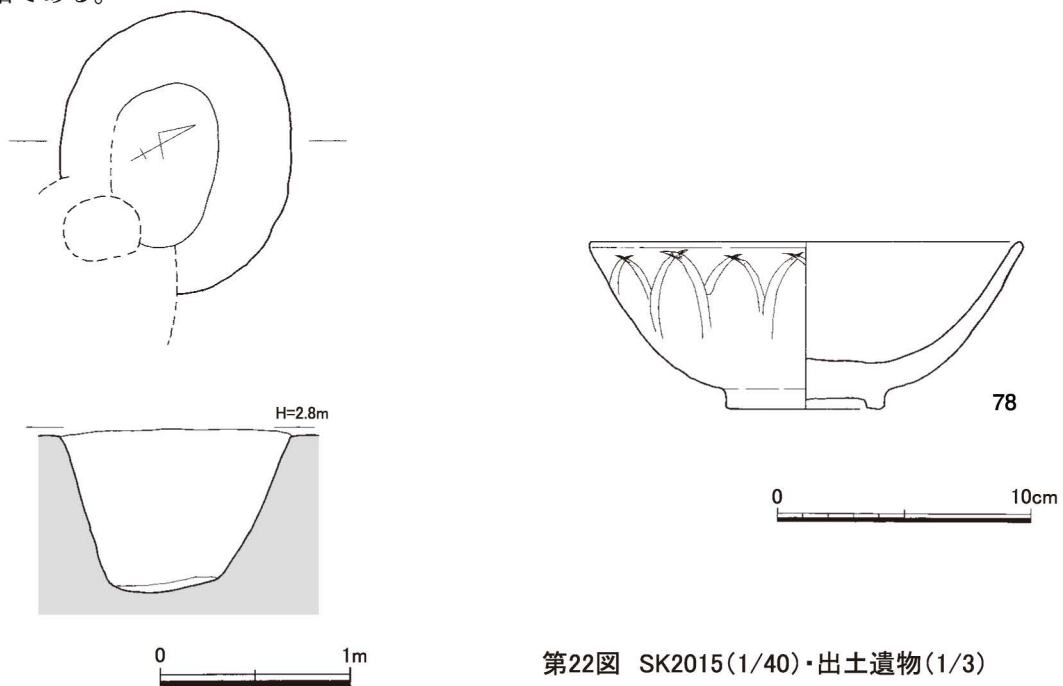


第21図 SK2005(1/40)・出土遺物(1/3)

出土遺物 (第 21 図) 72～77 は土師器の坏である。糸切り底である。口径 11.2～12.8 cm、器高 2.8～3 cm。1、3 に底部に板状圧痕が残る。75 は土師器の小皿である。復元口径 8 cm、器高 0.9 cm。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。76 は白磁碗の口縁部片である。復元口径は 16 cm である。灰白色の胎土に釉をかける。77 は滑石製石鍋の口縁部片である。削りが施され、内面に叩打痕が残る。以上から時期は 12 世紀中～後半を想定する。

SK2015 (第 22 図) 調査区中央で検出した土坑である。平面は長軸 1.5m、短軸 1.2m 程の楕円形を呈し、深さは 0.8m 程である。埋土は灰黄色砂質土を主体とする。

出土遺物 (第 22 図) 78 は青磁碗片である。復元口径は 17 cm、器高は 6.6 cm である。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に灰オリーブ色の釉をかける。外面に工具による鏝蓮弁を施す龍泉窯系。高台は露胎である。

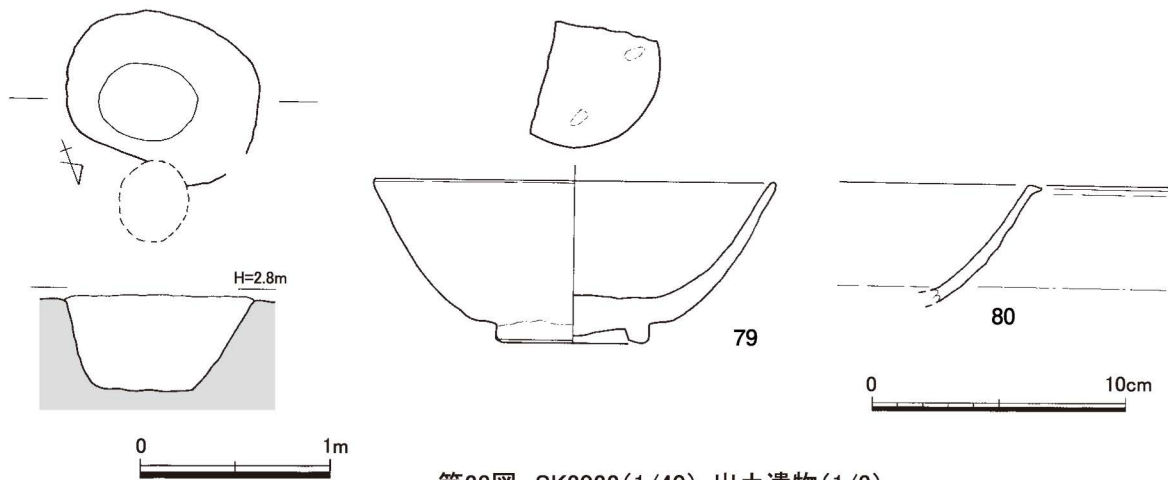


第22図 SK2015(1/40)・出土遺物(1/3)



**SK2022 (第 23 図)** 調査区中央北寄りで検出した土坑である。平面は長軸 1m、短軸 0.76m程の楕円形を呈し、深さは 0.5m 程である。一部別遺構に切られる。

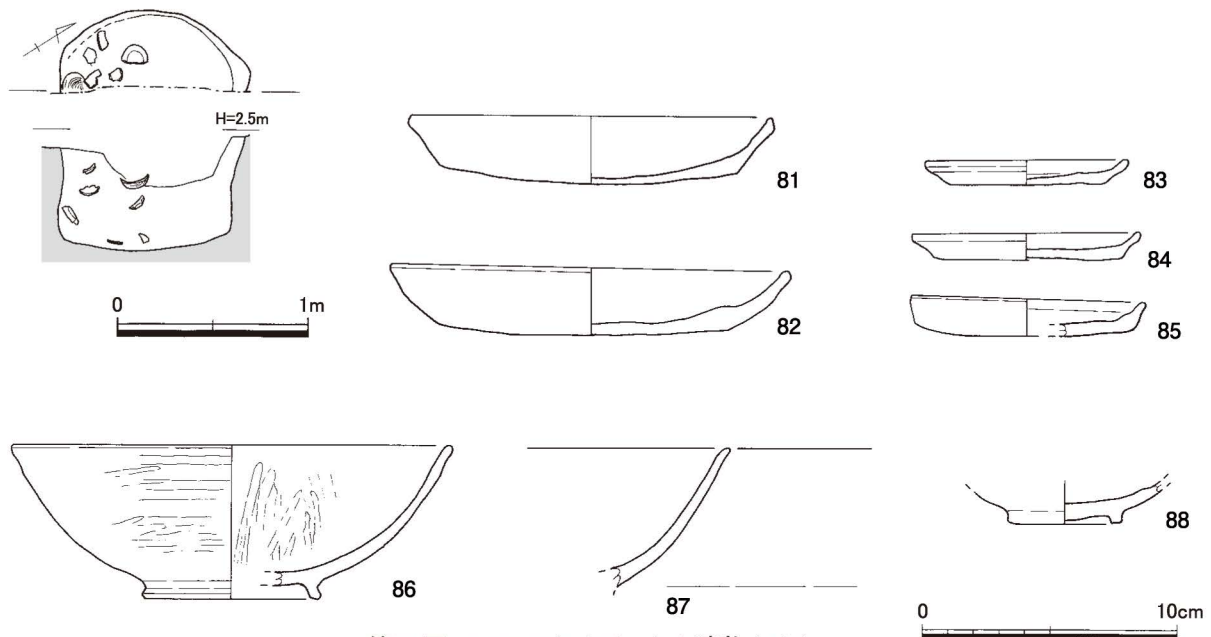
**出土遺物 (第 23 図)** 79 は青磁碗片である。復元口径は 15.8 cm、器高は 6 cm である。淡赤褐色の胎土に暗緑褐色の釉をかける。高台は露胎である。内面底部に目痕が残る。80 は白磁碗の口縁部片である。白灰色の胎土に白灰色の釉をかける。口縁部が屈曲し、上端部を水平にする碗V類-4a か。以上から時期は、12 世紀中頃～後半と想定する。



第23図 SK2022(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK2040 (第 24 図)** 調査区中央で検出した土坑である。平面は攪乱に切られているが、現状で長軸 1 m、短軸 0.4mを検出した。深さは 0.6m 程である。埋土は暗褐色砂質土を主体とする。

**出土遺物 (第 24 図)** 81～82 は土師器の坏である。83～85 は土師器の小皿である。86 は瓦器の碗である。復元口径は 17.4 cm、器高は 6.1 cm である。回転ナデによる成形ののち、外面は不定方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施す。87 は白磁碗の口縁部片である。白灰色の胎土に灰緑色の釉をかける。88 は白磁碗の底部片である。高台は露胎である。

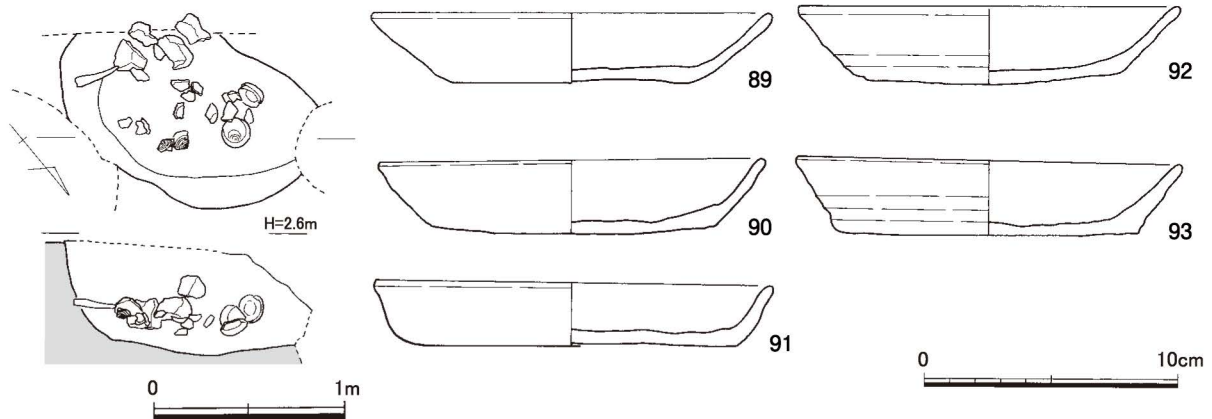


第24図 SK2040(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK2042 (第 25 図)** 調査区中央で検出した土坑である。平面は別遺構に切られるが、現状で長軸 1.3m、短軸 0.8m を検出した。深さは 0.5m 程である。深さ 0.2 ~ 0.4m 程の深さの間に礫と土師器の坏、動物骨が集中して出土した。

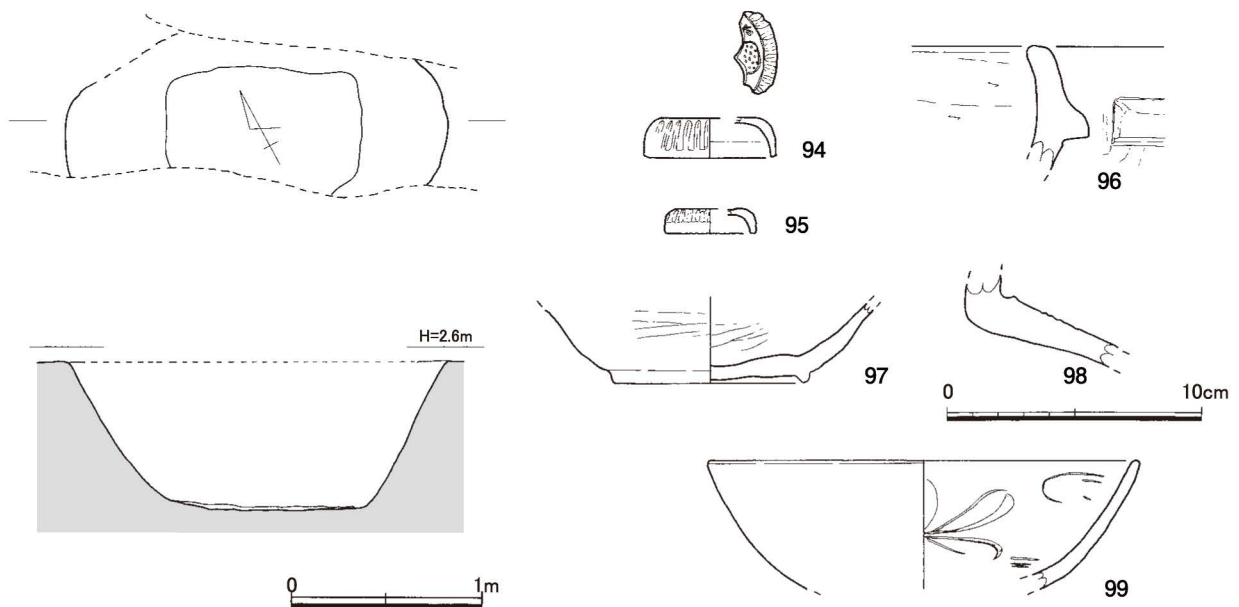
**出土遺物 (第 25 図)** 89 ~ 93 は土師器の坏である。口径は 15 ~ 15.4 cm、器高 2.5 ~ 3.1 cm。底部外形は回転糸切りで、わずかに板状圧痕を残す。口縁部外内面は回転ナデを施す。

**SK2055 (第 26 図)** 調査区中央東寄りで検出した土坑である。平面は別遺構に切られるが、現状で長軸 2m、短軸 0.6m を検出した。深さは 0.8m である。



第25図 SK2042(1/40)・出土遺物(1/3)

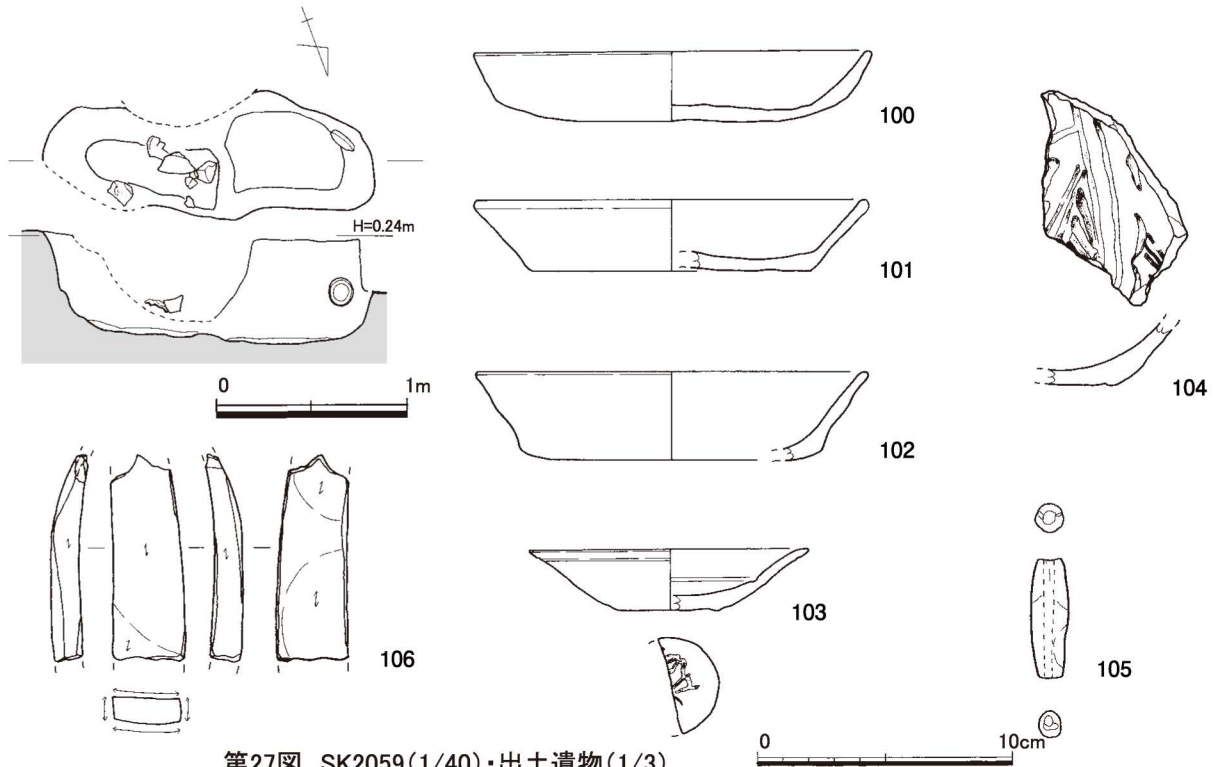
**出土遺物 (第 26 図)** 94 ~ 95 は合子の蓋である。94 は復元口径 5.2 cm、器高 1.6 cm。白灰色の胎土に淡い青緑色の釉をかける。肩には縦線の線彫りを施す。95 は復元口径 3.6 cm、器高 1 cm。白色の胎土に淡い青緑色の釉をかける。肩には縦線の線彫りを施す。96 は滑石製石鍋の口縁部片である、97 は瓦器碗の底部片である。外面内面ともに、ミガキを施す。98 は陶質土器の甕片である。外面に格子状叩きの痕跡が残る。99 は青磁碗片である。復元口径は 17 cm である。白灰色の胎土に灰オリーブ色の釉をかける。内面に片彫蓮花文を施す。



第26図 SK2055(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK2059 (第 27 図)** 調査区北東で検出した土坑である。平面は別遺構に切られるが、現状で長軸 1.7m、短軸 0.5m程の楕円形を呈し、深さは 0.56m 程である。

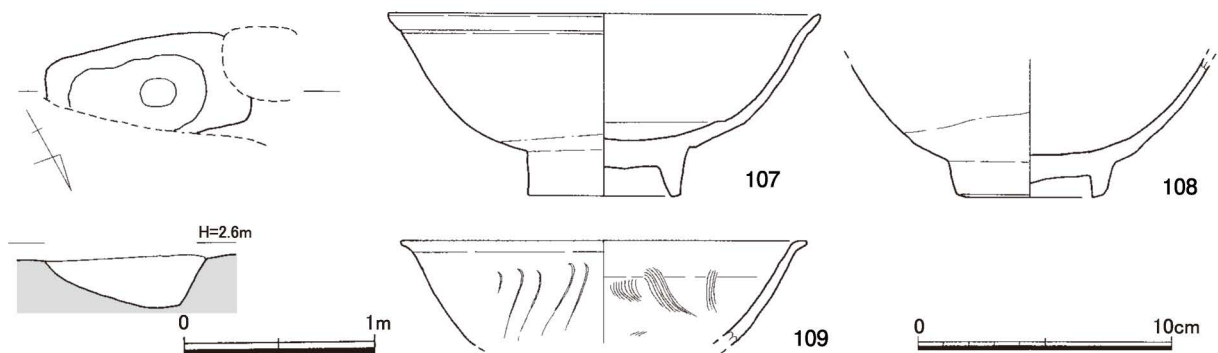
**出土遺物 (第 27 図)** 100～102 は土師器の坏である。口径 15.5～15.7 cm、器高 2.85～3.5 cm。底部外形は回転糸切りで、100、102 は板状圧痕を残す。103 は青磁皿の破片である。白灰色の胎土に淡い青緑色の釉をかける。底部外面に墨書がみられる。104 は陶器盤の底部である。内面に灰緑色の釉をかけ、鉄絵を施す。105 は土錘である。縦 4.8 cm、横 1～1.4 cm、厚さ 0.3～0.55 cm である。106 は砥石片である。縦 8.1 cm、横 2.4～2.8 cm、厚さ 1 cm である。4 面を砥面として利用している。



第27図 SK2059(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK2063 (第 28 図)** 調査区中央東寄りで検出した土坑である。平面は別遺構に切られるが、現状で長軸 1.1m、短軸 0.5m程の隅丸方形を呈し、深さは 0.26m 程である。

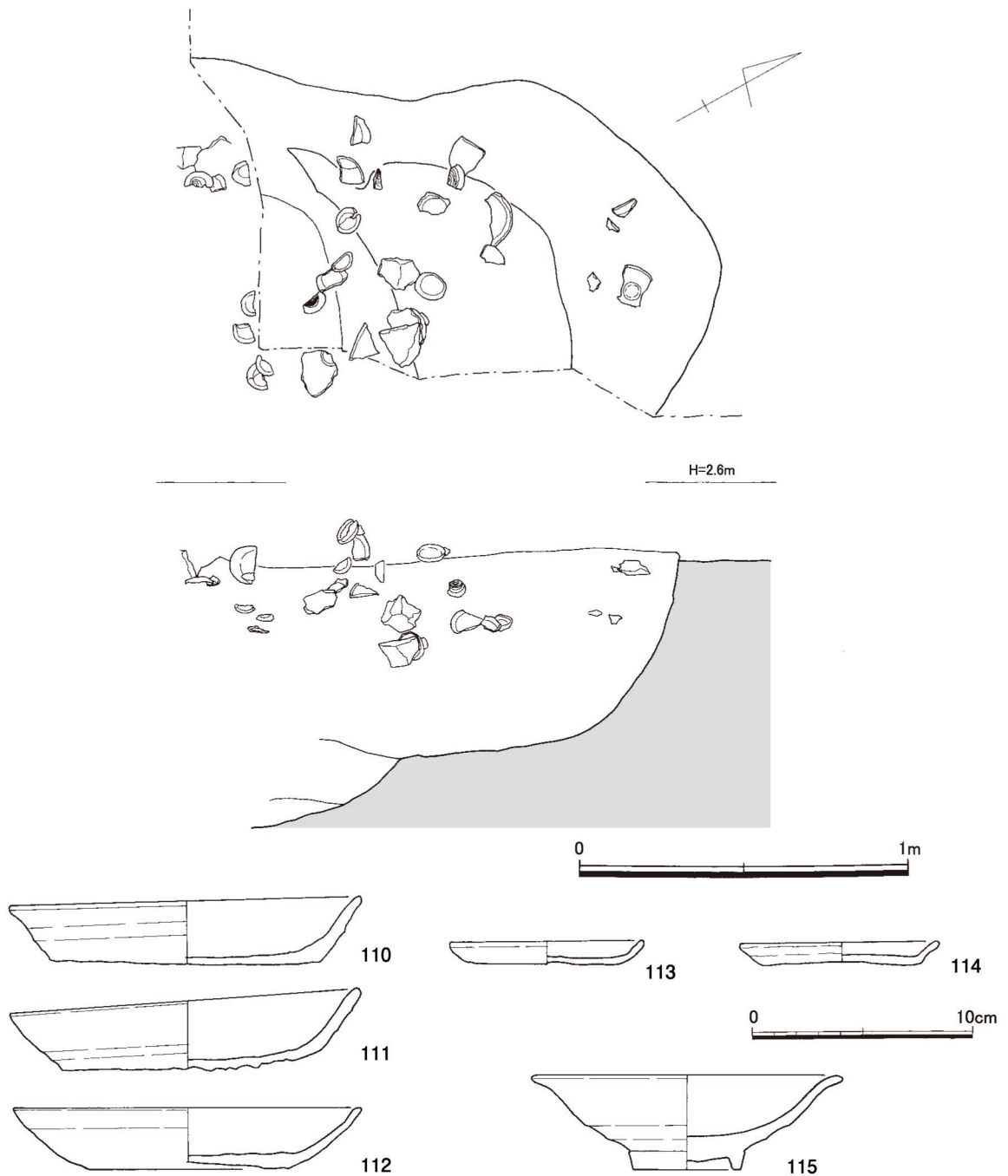
**出土遺物 (第 28 図)** 107～109 は白磁碗片である。107 は復元口径 17 cm、器高 7.2 cm である。白灰色の胎土に灰緑色の釉をかける。108 は底部片である。109 は口縁部が屈曲し、上端部を水平にする。内面に櫛目文、外面に縦篋花卉文を施す碗V類-4c。以上のことから 12 世紀中～後半を想定する。



第28図 SK2063(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK2092 (第 29 図)** 調査区中央南端で検出した土坑である。平面は攪乱に切られるが、現状で長軸 1.4m、短軸 0.9mを検出した。深さは 0.8m程である。埋土は暗褐色砂質土を主体とする。深さ 0.4m までの間に礫や土器が集中して出土した。

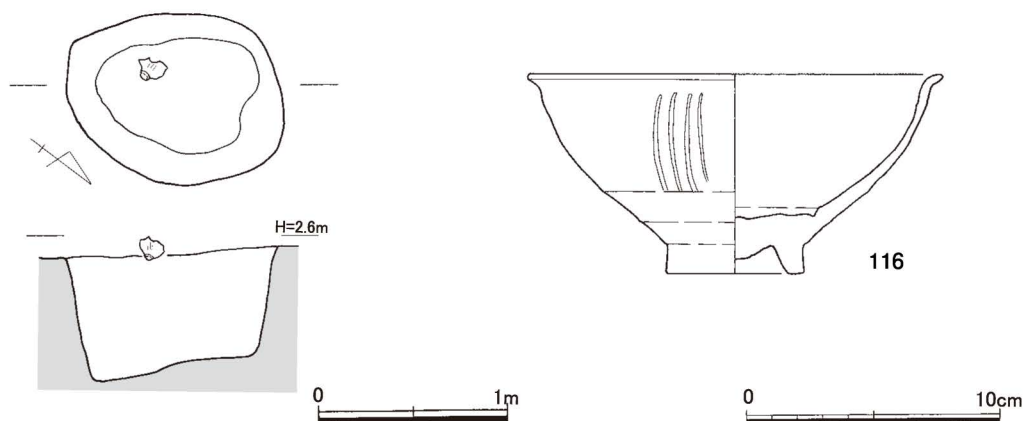
**出土遺物 (図 29 図)** 110～112 は土師器の坏である。口径 15.7～15.8 cm、器高 2.75～3.7 cm。底部外形は回転糸切りで、111 には板状圧痕が強く残る。口縁部外内面は回転ナデを施す。113～114 は土師器の小皿である。口径 8.7～8.8 cm、器高 1.1 cm。底部外形は回転糸切りを施す。115 は青磁碗である。口径 14.1 cm、器高 4.2 cm。灰白色の胎土に灰オリーブ色の釉をかける。内外面ともに無文である。



第29図 SK2092(1/20)・出土遺物(1/3)

**SK2093 (第 30 図)** 調査区中央西寄りで検出した土坑である。平面は長軸 1.1m、短軸 0.9m程の楕円形を呈し、深さは 0.6m 程である。埋土は暗褐色砂質土を主体とする。

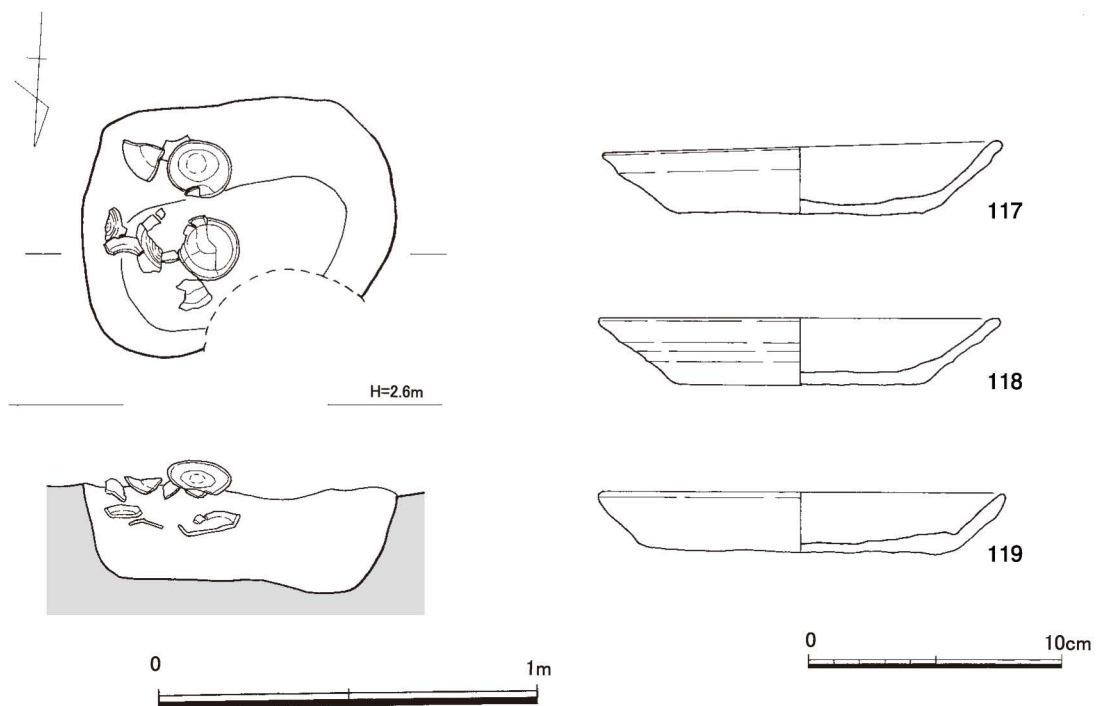
**出土遺物 (第 30 図)** 116 は青磁碗である。復元口径 16.3 cm、器高 7.8 cm である。灰白色の胎土に灰色の釉をかける。外面に櫛目文を施す。内面上部に沈線が 2 条入り、篋状の施文具による施文を施す同安窯系碗Ⅲ類-1c。以上のことから時期は 12 世紀中ごろ～後半と想定する。



第30図 SK2093(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK2100 (第 31 図)** 調査区南西寄りで検出した土坑である。平面は長軸 0.8m、短軸 0.65m程の隅丸方形を呈し、深さは 0.26m 程である。検出面から深さ 0.13m の間に土師器の坏片が集中して出土した。

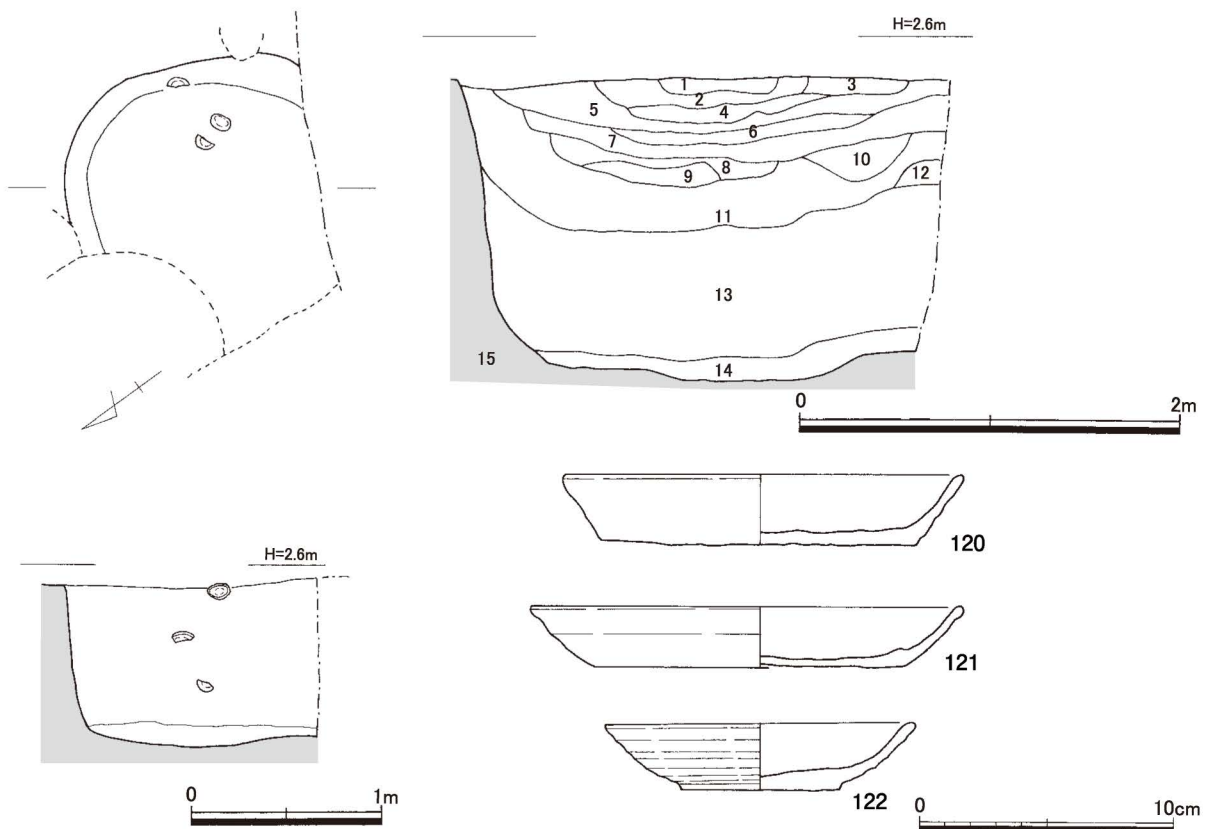
**出土遺物 (第 31 図)** 117～119 は土師器の坏である。口径 15.3～15.7 cm、器高 2.4～2.9 cm。底部外形は回転糸切りを施す。口縁部外内面は回転ナゲを施す。



第31図 SK2100(1/20)・出土遺物(1/3)

SK2107 (第 32 図) 調査区南西端で検出した土坑である。平面は別遺構と攪乱に切られるが、現状で長軸 1.5m 以上、短軸 1.3m 以上の円形を呈し、深さは 0.88m 程である。埋土は上部 0.4m までは暗灰褐色粘砂と明黄褐色砂質土が交互に堆積している。その下は粘性の強い暗褐色粘質土が厚く堆積している。そのため、深さ 0.4m までは一気に埋まったと考えられる。

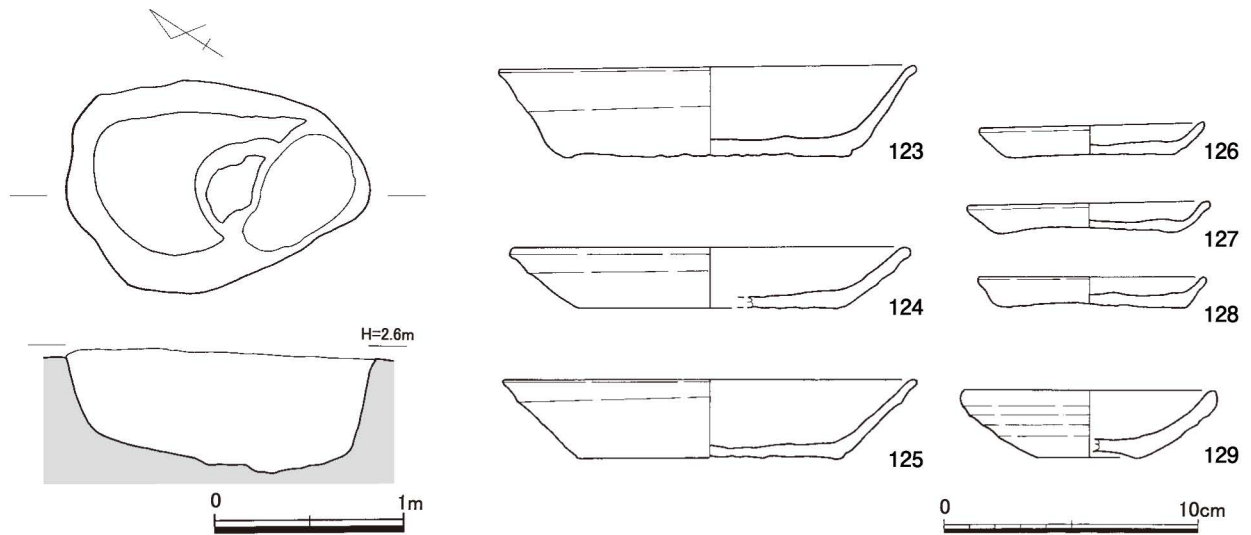
出土遺物 (第 32 図) 120～121 は土師器の坏である。口径 15.6～16.6 cm、器高 2.4～2.7 cm。底部外形は回転糸切りで、2 にはわずかに板状圧痕が残る。口縁部外内面は回転ナデを施す。内面底部は回転ナデ後に一定方向のナデを施す。122 は土師器の皿である。復元口径 12.2 cm、器高 6.2 cm。底部外形は回転糸切りを施す。口縁部外内面は回転ナデを施す。内面底部は回転ナデ後に一定方向のナデを施す。



第32図 SK2107・土層図(1/40)・出土遺物(1/3)

※土層注記

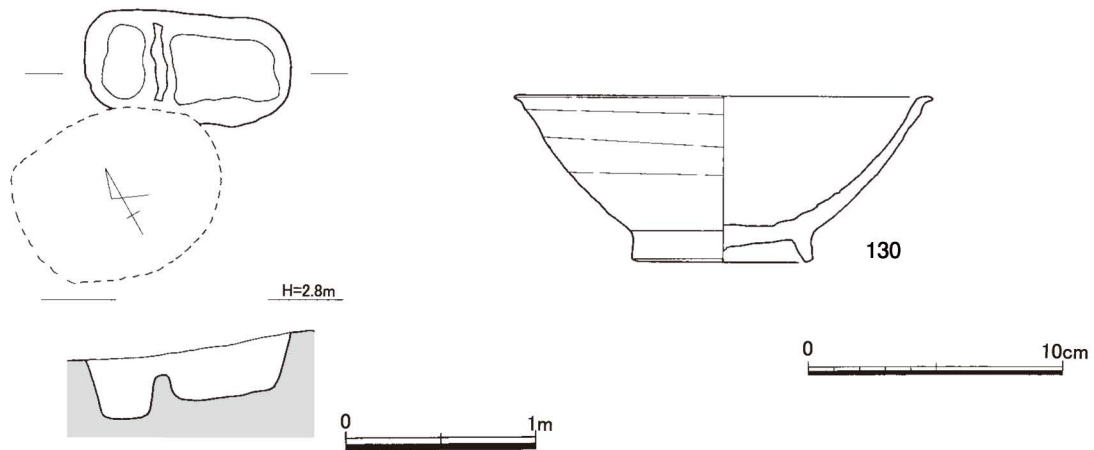
1. 暗灰褐色粘砂 炭化物(1～2mm)が少量混じる
2. 暗黄褐色砂質土 炭化物(50mm)が微量混じる
3. 暗灰褐色粘砂 炭化物(2mm)が微量混じる 1に似る
4. 灰褐色粘砂+明黄褐色砂 炭化物(5mm)が微量混じる
5. 暗灰褐色粘砂 微細な炭化物(1～2mm)が少量混じる 1に似る
6. 明黄褐色砂 間に暗灰褐色粘砂が少量混じる 2に似る
7. 暗灰褐色粘砂 間に淡黄色砂が少量混じる 5に似る
8. 淡黄色砂 間に暗灰褐色粘砂がブロック状に少量混じる
9. 暗灰色粘砂 炭化物(1～5mm)が少量混じる 1に似る
10. 淡黄色砂 間に暗灰色粘砂が少量混じる 8に似る
11. 淡黄色砂 暗灰色粘砂ブロック(10～12mm)が少量混じる 炭化物(2～3mm)が少量混じる
12. 淡黄色砂
13. 暗褐色粘質土 炭化物(2～10mm)が多量に混じる 間に灰色砂が少量混じる 粘性が強い
14. 淡黄色砂 暗灰色砂が混じり地山が汚れる
15. 淡黄色砂 地山



第33図 SK2110(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK2110(第33図)** 調査区北西で検出した土坑である。平面は長軸 1.6m、短軸 1.1mの楕円形を呈し、深さは 0.6m 程である。

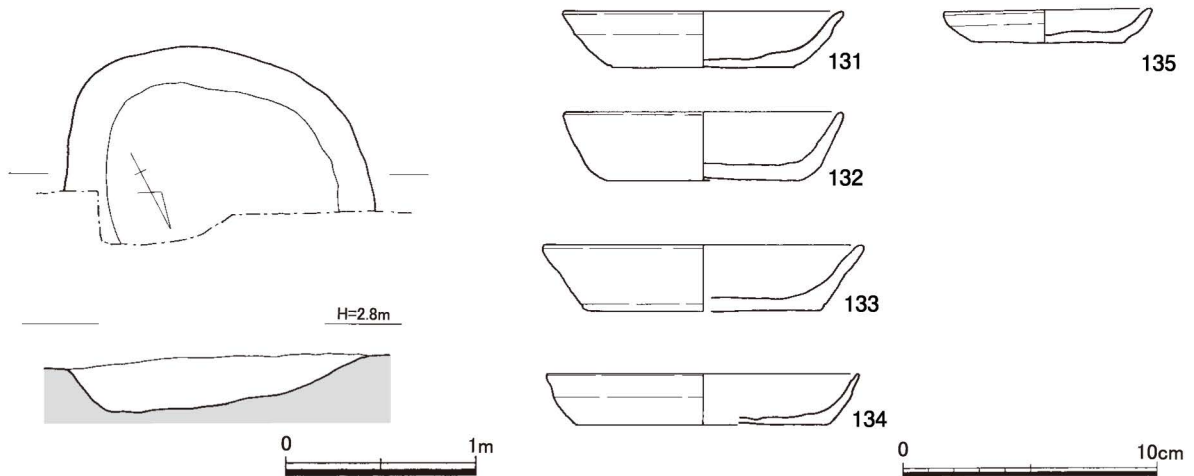
**出土遺物(第33図)** 123～125 は土師器の坏である。口径 15.2～16.2 cm、器高 2.4～3.6 cm。底部外形は回転糸切りで、板状圧痕を残す。口縁部外内面は回転ナデを施す。123、124 は内面底部に回転ナデ後一定方向のナデを施す。126～128 は土師器の小皿である。口径 8.7～9.2 cm、器高 1.2～1.4 cm。底部外形は回転糸切りで、127 にはわずかに板状圧痕が残る。口縁部外内面は回転ナデを施す。129 は陶器の小皿である。口径 9.7 cm、器高 2.7 cm。内外面に暗赤褐色の釉をかける。外面は回転ナデを施す。外底は上げ底に削られる。



第34図 SK2112(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK2112(第34図)** 調査区中央西端で検出した土坑である。平面は攪乱で切られるが、長軸 1.1m、短軸 0.55m程の隅丸方形を呈し、深さは 0.3m 程である。

**出土遺物(第34図)** 130 は白磁碗である。復元口径 16.4 cm、器高 6.55 cm。灰白色の胎土に色の釉をかける。口縁部が屈曲し、上端部を水平にする碗V類-4 a か。以上から時期は、12 世紀前半と想定する。



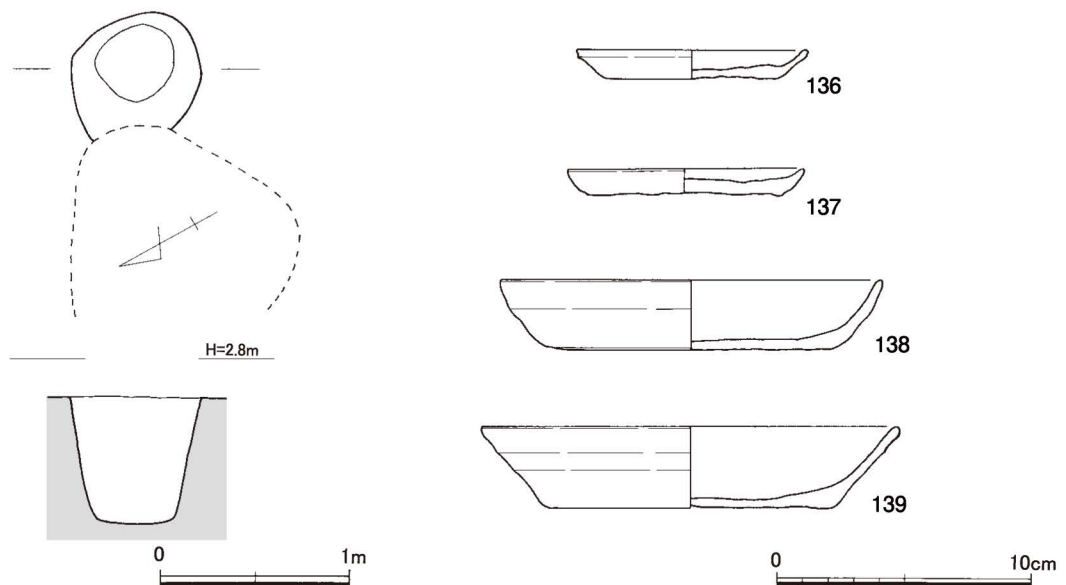
第35図 SK2113(1/40)・出土遺物(1/3)

**SK2113 (第 35 図)** 調査区北西端で検出した土坑である。平面は攪乱で切られるが、長軸 1.6m、短軸 1m以上の楕円形を呈し、深さは 0.26m 程である。埋土は灰黄色粘土を主体とする。

**出土遺物 (第 35 図)** 131～134 は土師器の坏である。口径 11～12.5 cm、器高 2～2.7 cm。底部外形は回転糸切りで、132 にはわずかに板状圧痕が残る。口縁部外内面は回転ナデを施す。内面底部は回転ナデ後に一定方向のナデを施す。135 は土師器の小皿である。口径 8.2 cm、器高 1.35 cm。底部外形は回転糸切りを施す。口縁部外内面は回転ナデを施す。

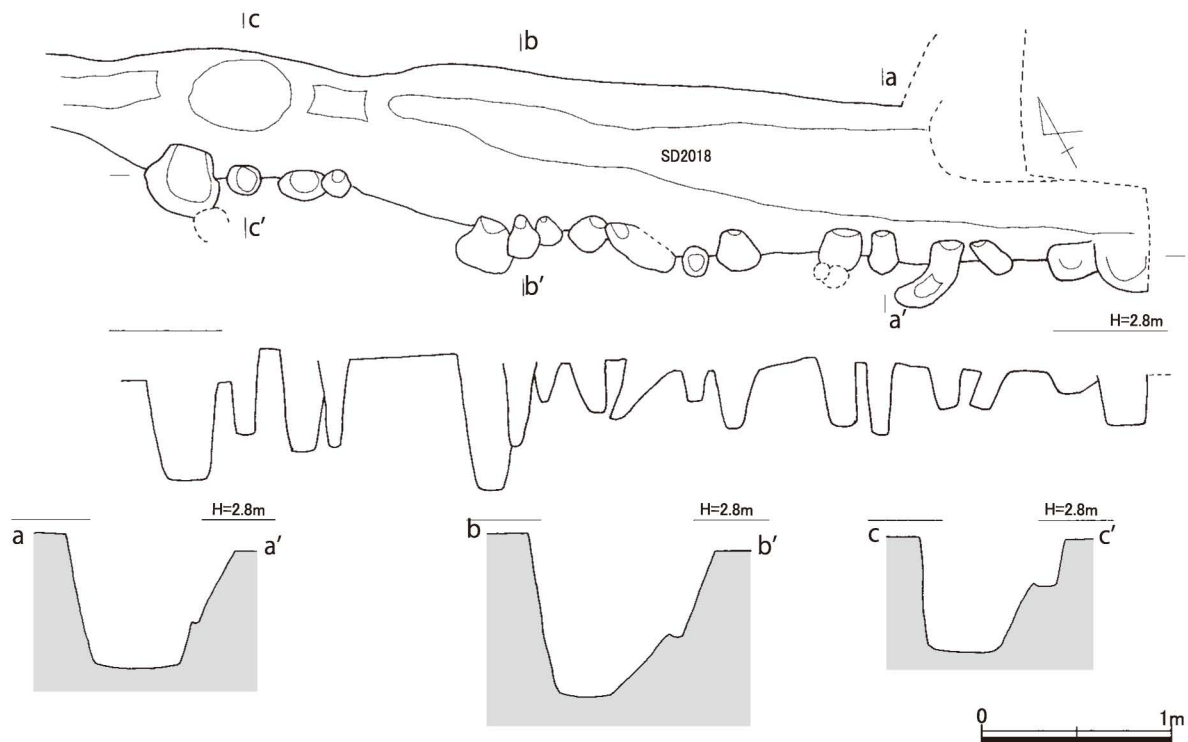
**SK2140 (第 36 図)** 調査区北西寄りで検出した土坑である。平面は別遺構に切られるが、長軸 0.7m、短軸 0.6m 以上の円形を呈し、深さ 0.68m 程である。

**出土遺物 (第 36 図)** 136～137 は土師器の小皿である。口径 9.1～9.3 cm、器高 1.1 cm。底部外形は回転糸切りで、136 にはわずかに板状圧痕が残る。口縁部外内面は回転ナデを施す。138～139 は土師器の坏である。口径 15～16.3 cm、器高 2.75～3.24 cm。底部外形は回転糸切りで、139 にはわずかに板状圧痕が残る。口縁部外内面は回転ナデを施す。内面底部は回転ナデ後に一定方向のナデを施す。



第36図 SK2140(1/40)・出土遺物(1/3)





第37図 柵列検出状況・横断面図(1/40)

### ③ 柵列

**柵列(第37図)** 調査区東SD2018南沿いで検出した柱穴列である。柱穴列の柱穴間が不規則で、底面高も最も深いもので約70cm、最も浅いもので約14cmと一定ではない。SD2018の北縁に沿って、粗砂を含む細かな整地層があり、道路の可能性もある。そのため、敷地の境界部分に建てられた柵列であったことが考えられる。出土遺物はごくわずかで土器の小片が出土している。

### まとめ

本調査地点である119次調査地点は海に向かって傾斜する斜面上に位置し、12世紀前半の平安時代末から鎌倉時代前期頃に盛土で整地を行い平坦面を築いている。調査区中央には東西方向の溝がある。この溝の北縁に沿って、粗砂を含む細かな整地層があり、道路の可能性もある。また、南側には柱穴が集中しており、柵の存在が考えられる。溝を挟んで南側が柵、北側が道路で敷地の境界部分であると考えられる。その後も若干南北にズレながらも溝が掘られている。13世紀後半から14世紀前半には厚さ5～10cm程の整地層があり、その上にも薄い整地が続く。その後、厚さ20～40cm程のやや雑な整地になり、14世紀中頃には礎石やそれに伴うグリ石がみられるようになり、溝はみられなくなる。

また、周辺で行われた21次、101次調査では12世紀中～後半の墓を検出しているが、今回の調査では墓等などの埋葬遺構は検出されなかった。

今後の周辺の調査で、今回検出した溝の性格や規模、周辺の土地利用について明らかになることが期待される。

#### 参考・引用文献

- 市原季彦・下山正一 2019「1. HZK1802地点におけるジオスライサー調査の成果」三阪一徳・谷直子編『箱崎遺跡-HZK1701・1702・1704・1705・1706地点一付 HZK1802・1803地点概要報告』(九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集) pp.118-130  
 久住猛雄編 2019『箱崎58』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1373集)  
 佐藤一郎 2013「第6章箱崎遺跡-古代末から中世にかけて」福岡市史編纂委員会編『新修福岡市史-特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』 pp.242-247  
 重松敏彦 2018「古代の箱崎と大宰府」九州史学研究会編『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版 pp.24-35  
 下山正一 1998「福岡平野の縄文海進と第四紀層」小林茂ほか編『福岡平野の古環境と遺跡立地-環境としての遺跡との共存のために-』九州大学出版会 pp.11-44  
 中尾祐太 2018a「考古学からみた箱崎と博多湾」『九州史学』180 pp.3-32  
 中尾祐太 2018b「考古学からみた箱崎」九州史学研究会編『アジアのなかの博多湾と箱崎』勉誠出版 pp.10-23



1. I区1面全景（北西から）



2. II区1面全景（北西から）



3. III、IV区1面全景（南東から）



4. I区2面全景（西から）



6. III区2面全景 (東から)



8. 調査区土層 (西から)



5. II区2面全景 (西から)

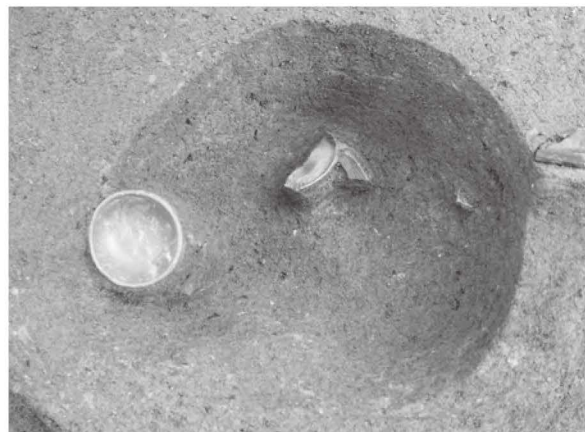


7. IV区2面全景 (東から)

図版3



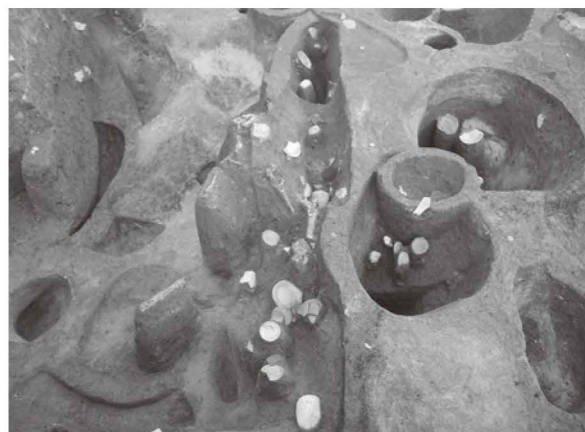
9. 整地層 (西から)



10. SK1041 (南から)



11. SX1044 (北から)



12. SD2018 遺物出土状況 (東から)



13. SD2058 (北から)



14. SK2040 (東から)



15. SK2042 (北から)



16. SK2092 (南から)



17. SK2100 (南西から)



18. SK2107 土層 (東から)



19. SD2018 南側杭列 (北から)

# 報告書抄録

ふりがな	はこぎき 70							
書名	箱崎 70							
副書名	箱崎遺跡第119次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1514集							
編著者名	田中 健							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
はこぎきいせき 箱崎遺跡 だいじ 第119次	ふくおかけんふくおかしひがしく 福岡県福岡市東区 はこぎき ちょうめ ぼん 箱崎1丁目2485番	市町村	遺跡番号	33° 37' 03"	130° 25' 24"	20210901 ～ 20211112	183	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
箱崎遺跡	集落	古代～近世	土坑 溝 柱穴	土師器、陶磁器、陶器、 石製品				
要約	<p>箱崎遺跡は博多湾に面した南北に延びる砂丘上に位置する。119次調査地点は海に向かって傾斜する斜面上に位置し、12世紀前半の平安時代末から鎌倉時代前期頃に盛土を行い平坦面を築いている。調査区中央には東西方向の溝がある。この溝の北縁に沿って、粗砂を含む細かな整地層があり、道路の可能性がある。また、南側には柱穴が集中しており、柵の存在が考えられる。溝を挟んで南側が柵、北側が道路で敷地の境界部分であると考えられる。その後も若干南北にズレながらも溝が掘られている。13世紀後半から14世紀前半には厚さ5～10cm程の整地層があり、その上にも薄い整地が続く。その後、厚さ20～40cm程のやや雑な整地になり、14世紀中頃には礎石やそれに伴うグリ石がみられるようになり、溝はみられなくなる。</p>							

## 箱崎 70

—箱崎遺跡 第119次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1514集

2024年3月22日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社 宏栄社印刷

福岡市南区清水1丁目10-5



